

日本アイスランド学会会報 44

〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

立教大学文学部 小澤実研究室内

日本アイスランド学会 ©

<http://www.icelandicstudies.jp/>

2025 年 7 月 19 日発行

印刷 立教プリンティングステーション

目次

1. 論文

金 京

アイスランドの観光市場における中国人移民：
新たな経済機会とネットワークに基づくエスニック資本の活用 1

2. 研究ノート

南澤 佑樹

アイスランド語簡易語形変化表 19

3. 公開講演要旨

金 京

アイスランドの観光市場における中国人移民コミュニティ：
新たな経済活動の機会とネットワークに基づくエスニック資本の活用
..... 54

Úlfar Bragaon (小澤 実 訳)

Snorri's Anger: Emotion and the Medieval Self 56

Branislav Bédi (小澤 実 訳)

Teaching Icelandic at Universities in Japan from a Historical Perspective:

Initial Research Questions and Observations 62

4. 新刊紹介

小澤 実

2冊の菅原北欧神話論の刊行をめぐる余滴 69

5. 彙報 71

(1) 日本アイスランド学会 2024 年度活動状況

(2) 2024 年度会員活動状況

(3) 会員の異動

6. 日本アイスランド学会会則	79
7. 投稿規定・著作権ポリシー・執筆要領	81

〈論文〉

アイスランドの観光市場における中国人移民：
新たな経済機会とネットワークに基づくエスニック資本の活用

金 京

(名城大学 非常勤講師)

要旨

本研究ではアイスランドの観光市場における中国人移民に着目して、彼らがどのようにエスニック資本を活用して労働市場における構造的障壁を緩和しているのか、そしてそれがどのように労働市場への統合を促すのかを明らかにした。中国人移民は、強いつながり、弱いつながり、潜在的なつながりに基づき多重的なネットワークを構築しており、これによりエスニック資本が蓄積されている。アイスランドを訪問する中国人観光客の増加がもたらした新たな経済活動の機会に応じて、中国人移民はエスニック資本を活用することで、自営業者と従業員の間で柔軟な関係を形成している。その結果、観光市場における季節性変動の影響を緩和することができるだけでなく、中国人移民が労働市場で垂直移動と水平移動をすることが可能となった。これにより、観光市場における中国人移民は労働市場への統合が促されるようになったのである。

キーワード：アイスランド、中国人移民、エスニック資本、ネットワーク、統合

はじめに

移民労働者が低賃金や劣悪な労働条件、職業における安全保証の不足などといった不利な状況に置かれることは多く指摘されている (Josep and Amado 2020; OECD 2024)。このような傾向は、アイスランドにおいても見られている。アイスランドでは1990年代末以降、経済発展に伴い労働市場で労働力不足が生じ、外国人労働者の流入が徐々に増えてきた。アイスランドの労働市場において移民は高い雇用率を持っているものの、漁業産業や建築業などの低技術産業に集中している (OECD 2024)。それは、外国人労働者の学歴や技術などの人的資本のミスマッチや言語能力の不備、労働市場のセグメント化の深化、社会関係資本の不足などにより、移民労働者が低熟練労働市場に取り残されていることが指摘されている (Júliúsdóttir and Skaptadóttir 2013; OECD 2024)。移民にとって就労は労働市場に統合される重要な要素であるが、不利な状況に置かれている移民労働者はホスト社会の労働市場に統合され難くなり、排除されやすくなる。こうした現状の中で、移民の就労に関わる人的資本や社会関係資本が議論の中心となっている。人的資本については、ホスト社会の言語学習や学歴取得、国籍取得や資格取得、滞在期間の長期化などが、就労機会の拡大や仕事の質、収入の増加を促すことができる (Wouter 2019; Zwysen 2019; Skaptadóttir 2019)。また、社会関係資本については、移民は家族や友人とのネットワークを通じて仕事の情報にアクセスすることが多いが、移民同士間のネットワークは同質偏向 (homophily) のメカニズムによりネットワークの有効性の低下が指摘されている (Ted 2003; Kracke and

Klug 2021; Skaptadóttir 2019)。すなわち、低熟練労働市場で働く移民が提供できる仕事の情報は、同じ職場環境での情報であるということである。一方、ホスト社会の本国人との間で形成されたネットワークは、移民により相応しい仕事の情報にアクセスすることに役立つ (Kracke and Klug 2021; Biggeri et al. 2022)。しかし、これらの研究では、個々の移民に着目して、彼らを囲む労働市場環境の分析が中心となっている。

アイスランドでは 2010 年代以降、観光業の急成長に伴い大量の雇用機会が創出されており、観光業は移民労働者が最も多く従事している産業となっている。観光市場における移民は季節性と国際市場の変動の影響を受け、低賃金で不安定な生活を送っている (Júlíusdóttir 2020; Wendt et al. 2020)。観光を通すローカル市場とグローバル市場の相互作用が進んでいる中で、移民の就労はホスト社会の労働市場だけでなく、国際市場や母国の影響をも受けるようになってきている。そのため、移民の経済活動に影響を与える要素としては、ホスト社会の市場環境だけでなく移民の母国の経済的影響力およびエスニックコミュニティの役割も考慮すべきである。エスニック資本とはある移民集団が共有する社会的、文化的、経済的資源の総称であり、エスニック資本への着目はローカルとグローバル市場が徐々に絡み合う中で、移民集団がどのように地域社会の市場環境だけでなく、移民の母国の影響を受けているのかを総括的に考察することができる。

本研究ではアイスランドにおける中国人移民集団に着目するが、それは、アイスランドの観光市場における中国人観光客の増加および中国経済のプレゼンスの高まりは、アイスランドと中国の市場関係を強化しており、観光グローバリゼーションが移民の統合に与える影響を考察することに役立つためである。また、在留中国人移民は規模が小さいものの集団内部の構成員は非常に多様になっているために、ネットワークの複雑性を議論することに寄与するだろう。金の研究では、中国人観光客の増加に伴う観光市場における中国人移民の経済活動の多様な形態、自営業者、ツアーガイド、旅行会社の社員などを明らかにしたが、母国の経済的プレゼンスが高まる中で、エスニック資本がどのように彼らのホスト社会への統合に影響するのかについてはまだ論じていない (金 2021)。

従って本研究では、観光市場における中国人移民がエスニック資本の活用を通じて移民の経済活動を制限する諸障壁による影響を低下させることができるのかを明らかにする。また、この分析を通じて、エスニック資本がホスト社会への統合にポジティブな影響を与える可能性を考察する。これを解明することは、アイスランドにおける多様化する移民の労働市場への統合の状況を改善するために重要である。本研究では著者が 2017 年 8 月から 2018 年の 7 月までの 1 年間、アイスランドに滞在し、フィールド調査を通して収集したデータを元に分析を行った。調査内容は、中国人移民の就労状況を分析するために、彼らがどのように観光業に従事しているのかについて、半構造化インタビュー調査を実施した。

1. 資源としてのエスニック資本：中国人移民のネットワークと経済活動の機会

エスニック資本とは、共通の出身や言語、慣習を持つエスニック集団がネットワークを通じてアクセス可能な物質的・象徴的な資源である (Maani et al. 2015: 5; Kim 2018: 2)。エスニック資本はエスニック集団がホスト社会において適応する過程で構築され、自己再生

機能を持っている(周、林 2004; 王 2009)。そのため、エスニックコミュニティをめぐる内的・外的環境を解明する上で、エスニック資本の機能を解明することが重要である。

中国人移民のエスニック資本に関する研究では、主にチャイナタウンやエスニック飛地を中心にエスニック資本がどのように集中地域内での中国人移民の経済活動に影響を与えているのかが指摘されている(Zhou 2004 ; Zhou and Lin 2005)。エスニックネットワークはエスニック資本を形成する中核的な要素である(Wang and Maani 2014: 3)。親戚、友人、同郷者をはじめとする「関係」(グワンシー)については、それが中国系移民の起業活動を成功させるためのリスクの共有や経済的サポートなどの提供を行っていることが指摘されている(Luca 2004; Kim 2018)。特に、ネットワークは起業活動において同族労働力という資源に対する柔軟なアクセスを可能にする(Biggeri et al. 2022)。しかし、緊密なネットワークは人々を密接に連結させるため、均質で閉鎖的な凝集性の高いネットワークを形成し移民集団内部の緊密な関係性を持っていない移民との間の断片化した関係をもたらすことがある(Granovetter 1997; Luca 2004)。また、華僑華人の起業家と労働者の関係は互惠関係である一方で、搾取するとされる関係でもあり、相互間の不平等な関係性が指摘されている(王 2009 ; Kim 2018)。Biggeri らによると、ネットワークはエスニック工業集落における起業活動の初期段階において重要であるが、企業の規模が大きくなり、専門性のレベルが向上するにつれて、よりホスト社会の経済・社会環境の影響を受けるようになり、移民ネットワークへの依存が弱くなる(Biggeri et al. 2022)。

移民集団内部の多様化や人的資本の蓄積による生存戦略の変化、社会経済地位の向上による居住の分散化、移民間の相互依存の低下などにより雑居や分散的居住が進むことにより、「脱集住型」のエスニックコミュニティの形態が現れるようになる(Adam et al. 2017; Ling 2005; 長友 2008)。こうしたエスニックコミュニティにおいては、従来の親密なネットワークよりも弱い紐帯に基づくネットワークの役割が増えてきている(周、林 2004)。強い紐帯(親族や家族)による支援に加え、弱い紐帯(疎遠な知人)による情報提供が、仕事探しにおいて有益であると指摘されている(Granovetter 1973)。それは、人と人の間のネットワークが強いほど、彼らの間の類似性が高くなるため、特に仕事を探す際には、強い紐帯よりも弱い紐帯で繋がっている人から得られる情報がより有益であるということである(Granovetter 1973)。中国人移民はエスニック資源や強い・弱い関係などを活用することで交易のコストを減らすことができる(Yang et al. 2012)。それに加え、Haythornthwaite は潜在的なつながり(latent ties)という概念を提唱している(Haythornthwaite 2002)。移民のエスニックネットワークは有効な資源として存在しているが、個々の移民のアクセスには差が存在する(Ryan 2011)。シェンとグンは中国人の Wechat の使用状況の分析を通じて、モバイルソーシャルネットワークの使用によって個人とグループの関係がいかにかにコミュニティ内で人的資源を獲得し、信頼関係を築いていくのかを明らかにした(Shen and Gong 2018)。同研究は、Wechat を通じた個人とグループのネットワークは、強い紐帯、弱い紐帯、潜在的な紐帯というような多様な関係を形成し、そこで人々は異質な情報や物質的な資源などを獲得することができると指摘する。Haythornthwaite は、ソーシャルメディアは私たちが関係の弱い、あるいはまったく関係のない、より広い範囲の個人にアクセス

することを可能にすると述べ、それによって潜在的な紐帯のインフラストラクチャが構築されて、弱い紐帯を発展させ強化することが可能になったと指摘する (Haythornthwait 2002)。

従って、エスニック資本がどのように移民集団の経済活動に影響を与えているのかについて、その有効性を検討するためには移民集団が置かれているホスト社会の労働市場・社会の環境、母国の影響力、移民集団内部の構造を並行して考える必要がある。

2. アイスランドの観光市場における移民労働者のジレンマ

アイスランドの観光業は、2000 年代までは経済の多様化を支えるオプションと見なされていたが、2010 年代以降、経済危機を経て急成長を遂げ、危機からの回復を促す主要な産業となった (Jóhannesson et al. 2010: 281)。観光業の経済的貢献を見ると、観光が直接的に GDP に占める割合は 2010 年にはわずか 3.5% だったが、2019 年には 8.3% へと大幅に上昇し (Statistics Iceland 2024)、OECD 諸国の中でも急成長を遂げた国の一つとなった (OECD 2019)。現在、観光業はこの国の主幹産業へと成長した。しかし、2020 年の新型コロナ危機により、人の移動が一時的に抑制され、世界の観光市場は深刻な打撃を受けた。アイスランドにおいても 2020 年の訪問者数は 482,108 人へと激減しており、同国の観光業が国際市場の変動に大きく左右されたものであったことが明らかとなった。

観光業は労働集約型産業であるため、国際観光客の急増に伴い労働力需要が高まっていた。アイスランドを訪れる外国人訪問者数は、2008 年の 472,672 人から 2024 年には 2,261,391 人へと約 5 倍弱に増加した (Statistics Iceland 2024)。これは、アイスランドの総人口 (2024 年に 383,726 人) の約 5.9 倍に相当した (Statistics Iceland 2024)。こうした結果、労働市場に新たな就労のニーズが生まれた。就労は外国人労働者がアイスランドへ移住する重要な動機である。1990 年代末からアイスランドでは外国人の流入が徐々に増えてきたが、外国人労働者は初期においては漁業産業における人手不足により漁業加工工場で働くことが多かったが、その後の建築業や製造業の発展に伴い、これらの産業で働くようになった。アイスランドにおける移民の総人口は 1998 年の 12,428 人から 2024 年の 81,795 人まで伸びた (Statistics Iceland 2024)。2008 年の経済危機からの回復段階において観光業の成長が起こったが、外国人の持続的な流入は観光市場における人手不足が原因の一つと言える。その結果、観光市場における雇用者数は急増し、2024 年には 223,047 人に達し、総雇用者数の 14% を占めることとなった (Statistics Iceland 2024)。ただし、観光業関連の仕事は季節性の波を受けやすく、低賃金、不安定、流動性が高いといった構造的な特徴を持っている (Williams and Hall 2000: 13; Joppe 2012)。そのため、観光市場の雇用者の 45% が移民労働者であり、移民が最も多く従事する産業となっている (Statistics Iceland 2024)。移民労働者がこの産業で多く働いているのは、参入障壁が低く、言語や職務経験に対する要件が比較的緩やかであるからである (Margrét et al. 2020: 127)。

アイスランドの観光市場は少数の大企業を除けば、多数の小企業や家族経営企業によって構成されている (Jóhannesson and Huijbens 2013: 139)。そのため、移民労働者は臨時雇用が多く、また関連企業は労働協議や労働者の権利に関する知識が不足している場合が多いこともあり、移民労働者は労働組合による保護が十分でないことが指摘されている (Júlíusdóttir and Halldórsdóttir 2020: 186-188)。言語能力やホスト社会の文化・慣習への理解

アイスランドの観光市場における中国人移民

は移民労働者の統合にとって重要な要素であるが、アイスランドの労働市場においては移民労働者の言語能力や教育、職務経験の価値が適切に評価されないことが多い (Margrét et al. 2020; OECD 2024)。例えば、専門職の移民労働者であってもアイスランド語のアクセントや熟練度が昇進の機会に影響を与えることが指摘されている (Christiansen 2020)。そのため、観光市場における移民労働者の昇進や上昇移動の可能性は限定的であり、これが移民労働者の労働環境を不安定にし、労働市場への統合に対する障壁となっているのが現状である。

以上のように、アイスランドの観光業において移民労働者は重要な役割を果たしているが、観光市場の季節性や国際市場の変動により、低賃金や雇用の不安定性が構造的な障壁となっており、移民労働者は昇進の機会の不足や労働条件の脆弱さに直面しているのである。

3.アイスランドを訪問する中国人観光客

世界観光市場において、中国は主要な観光客の送出国となっている。中国人の海外旅行は、新中間層の拡大に伴い2000年代以降はレジャー目的で遠距離を経てヨーロッパへと向かう傾向が強まった (Smed and Bislev 2016 ; Andreu et al. 2013)。この傾向は、ビザ申請の簡易化や可処分所得の増加といった要因により加速された (Smed and Bislev 2016)。

このような背景下で、2010年代以降、中国人観光客の間でアイスランドへの関心が増えつつあった (Cai, Ma and Lee 2020 ; Xie and Tveteras 2020)。アイスランド統計データによると、中国大陸からの観光客数は2010年の5,194人から2024年には85,828人へと増加したが、これは在留中国人移民の約115倍に相当する (Statistics Iceland 2024)。増加の要因としては、いくつかの重要な影響が指摘されている。第一に、映画やSNSなどのメディアによる宣伝効果である (Hao, Xu and Zhang 2019)。中国のSNSプラットフォームであるウェイボ (微博) や小紅書 (小红书) を通じて、アイスランドに関する自然景観や優れた福祉制度、ジェンダー平等といったキーワードが取り上げられ、中国人のアイスランドへの関心を高めた (Hao, Xu and Zhang 2019)。

第二に、中国人の海外旅行のニーズが多様化していることである。中国人旅行者の属性や動機、訪問先の特性に基づき、アウトバウンド市場の細分化が進行したのである (Quer and Peng 2022)。アイスランドはフランスやイギリスなどの伝統的な観光地と異なり、新興目的地として注目を集めたが、その背景には中国人の消費傾向の変化が関わっている。従来のショッピング中心の旅行から、文化体験を重視する傾向へとシフトし、観光客の混雑を避け、より静かでゆっくりと過ごせる場所が選ばれるようになってきた (UNWTO and China Tourism Academy 2019)。こうした傾向の中で、アイスランドに対する「二級の目的地」(second-tier)や「冒険旅行」、「ハイエンド旅行」といったイメージが確立された (Jørgensen et al. 2018; Cai, Ma and Lee 2020)。Cai, Ma and Lee は、北極地域を訪れる中国人観光客は身体的・精神的なチャレンジを経験し、それを乗り越えることで満足感や充実感を得ると述べており、アイスランド旅行への関心の高まりを裏付けている (Cai, Ma and Lee 2020)。

第三に、アイスランド観光局によるプロモーションの強化と、旅行会社による中国人観

光客向けサービスの多様化である。アイスランドの旅行会社では、中国語によるウェブサイトの提供や中国語ガイドの増員、中国人スタッフの雇用を進めている。また、アイスランド観光局は中国で開催される博覧会に定期的に参加しており、例えば 2024 年に西安で開催されたシルクロード国際博覧会では中国市場でのプロモーションを強化した。こうした多様な要因が相互に影響した結果、中国人のアイスランド訪問者数は増加傾向にあり、今後も継続的な成長が見込まれる。

このように、観光を通じたアイスランドと中国の交流は 2010 年代以降活発化してきた。しかし、新型コロナ危機により中国人訪問者数は減少し、2024 年の訪問者数は依然として最高値を記録した 2019 年を下回っている。ただし、2021 年からは年々増加傾向にあり、このことはアイスランドと中国の観光交流が回復しつつあることを示している。この回復に従い、観光市場における中国人移民の需要は引き続き存在していると言える。

4. アイスランドにおける中国人移民コミュニティの特徴

中国人の海外移住の歴史は長いですが、中国人のアイスランドへの移住は比較的に新しく、1980 年代前後からのものが多い。その移住の歴史は、主に三つの段階に分けられる (金 2021)。初期移住者 (1970 年代から 1990 年代前半まで) は、改革開放以降の移住の波に乗り、留学生や派遣スポーツコーチが主な構成員であった。第二段階 (1990 年代から 2000 年代半ばまで) は、初期定住者の家族や親族、および留学生の移住が中心となった。第三段階 (2000 年代半ば以降) では、移民政策の制限の影響を受け、留学生および結婚を通じた女性の移住がメインとなった。このように、多様な移住形態により、在アイスランドの中国人移民の集団は、学歴、技術、言語能力、出身地といった点で多様化している。アイスランド統計局のデータの「出身国別人口」(Population by country of birth) によると、中国大陸からの移民は 1998 年には 116 人であり、2024 年にも大きくは伸びておらず 740 人である (Statistics Iceland 2025)。これは 1998 年の外国出身総人口の 0.93% を占めている。しかし、2024 年には 0.9% と、その割合は減少している。中国人移民の総人口は増加したものの、移民全体の中で占める割合は微減しているのである。アイスランドにおける移民集団別の割合をみると、ポーランド人が 27% を占めており、圧倒的な一位である。それにデンマーク、リトアニア、ウクライナ、ルーマニア、米国、フィリピンなどが続いており、ヨーロッパ諸国からの移民が多いことが特徴である。また、フィリピン人移民は、第六位を占めており、その割合は 3.2% であった。ここから、アイスランドにおける移民の割合は増加しているものの、非ヨーロッパ地域からの移民の割合は全体的に少ないことが分かる。初期移民から約 40 年経った現在にいたるまで、中国移民集団は依然として小規模なエスニック集団なのである。

アイスランド中国人移民は、特定の集住空間を形成せず、主に首都圏に分散して居住している。この居住形態には外的・内的要因が影響を与えている。山下によると、外的要因としては、「ホスト社会からの差別や排除などの不親切な環境や、住宅市場における移民集団への差別、社会経済的地位が低い移民集団の職業選択の範囲の制限」などが挙げられている。一方、内的要因としては、「防御、相互扶助、伝統の保持」が指摘されている (山下 2008:30)。まず、ホスト社会の環境を見ると、アイスランド人の多くは移民の増加に対

して比較的肯定的な態度を示している (Murdock 2020)。その背景には、アイスランドの労働市場における低失業率とセグメント化がある、移民は主にアイスランド人が従事したがない職業に就くため、本国人の雇用機会を脅かす存在としては見なされにくいのである (Ólafsdóttir 2020)。次に、住宅市場における移民の居住状況を見ると、近年、一部の移民集団に対する排除の動きが指摘されているが、中国人移民の場合、その影響は限定的である。聞き取り調査によると、Breiðholt 地区にはいくつかの中国人家庭が集まっているものの、それ以外に明確な集中地域は見られなかった。また、中国人移民にとって、「貯金して家を買う」ことが一つの習慣であり、多くの定住者がすでに家を購入していることが聞き取り調査から判明している。一方で、自宅を持っていない中国人移民の多くは、留学生や中華レストランのコックとしてアイスランドに移住した人々である。前者は卒業後アイスランドを離れることが多く、後者は雇用主が住居を提供するケースが多いためである。最後に、労働市場における職業選択の観点から見ると、中国人移民は研究者や経営者から、レストランの従業員、漁業会社の低熟練労働者まで、幅広い職種に従事している。近年では、観光業の発展に伴い、中国人移民の雇用機会が増加したが、それ以前はエスニックビジネスの展開が限定的だったことから、すでに分散的な居住形態が確立されていたのである。

5. 中国人移民の集団内部におけるネットワーク構築の経路

アイスランドにおける中国人移民は小規模な移民集団であり、長年にわたりエスニック組織が開催する文化活動を通じて移民同士のネットワークを形成・拡大してきた。中国人移民の集団内部には、大きく二つのエスニック組織が存在する。一つは 1995 年に設立された「アイスランド華人華僑組織」であり、文化活動を通じて「友情と交流」を促進する非政治的な活動を行っており誰でも参加できる。もう一つは、観光業の発展を背景に 2015 年前後に設立された「アイスランド中国人ツアーガイド協会」であり、観光業に従事する経営者やツアーガイドを対象としている。林によれば、個人は「個人資源」と「社会資源」の二つの資源を有し、前者は物質的・象徴的な所有権に基づくものであり、後者は社会関係を通じて獲得されるものである (林 2005: 20)。そのため、これらのエスニック組織は新たな社会資源を獲得するための基盤を提供していると言えるだろう。

中国人移民にとって血縁や地縁は親密な関係を維持するための重要な要素であるが、アイスランドにおける中国人移民は出身地や学歴、職業などが多様化しているため、血縁や地縁を除いたネットワークによって繋がっている。すなわち、親族や家族を中心とする親密な関係が存在する一方で、移住後にエスニック組織の文化活動への参加を通じて形成された「顔見知り」のような緩やかな関係も存在するのである。Bourdieu は、相互作用のネットワークは自然発生的なものではなく制度化された体系の中で形成されたものであると指摘し、その中には親戚関係、近所関係、職場関係などが必要に応じて選択的に結びついていると述べている (Bourdieu 1986: 248)。在留中国人移民も必要に応じてエスニック組織が行う活動に参加し、ネットワークを広げている。

「私はアイスランドにきて以来、あまり協会の活動に積極的に参加してこなかった。私はここ 2、3 年にガイドの仕事をしたが、イベントに参加するようになったのはそれからだ。」(C さん, 2018)

また、移民同士の親密な関係は国籍だけで決まるものではなく、同じ出身国という要素に加えて、共通の趣味やキャリアパス、教育背景なども重要な要素であるとの指摘もある (Ryan 2011: 721)。そのため、エスニック組織のイベントに参加したとしても、すべての移民がエスニシティのみを基盤に緊密な関係を築くわけではない。

「2008 年前後にきた結婚女性たちは、あまり活動に参加しなかったため、長い間彼女らが誰であるかが分たなかった。(略) 今留学生はおよび 20 人いると聞いたが、留学生会の会長の他にあまり他の人は知らない」(W さん, 2016)

近年、観光客の増加に伴いアイスランドの観光市場における中国人移民の経済活動が活発化しており、それに伴う移民同士のネットワークの構造の変容が見られる。中国人移民は自営業者 (旅行会社や中華レストラン)、ツアーガイドなど、多様な形態で観光市場において働いている (金 2021)。

また、そこでは、文化活動を通じて知り合った二人の移民が観光業での協力を通じて雇用関係へと発展するケースや、親友同士だった二人が共同で自営業を営むことで友情に加えてビジネス上の関係が形成されるケースなども見られるのである。ネットワーク構築の補助ツールとして、ソーシャルメディア、特に Wechat グループの活用が重要な役割を果たしている。2010 年代以降、Wechat グループは積極的に使われるようになり、各エスニック組織がそれぞれのグループを運営している。新しく移住した中国人はまずは「華人華僑組織」の Wechat グループに参加し、その後、ニーズに応じて他のエスニック組織のグループに加入することができる。中国人移民集団内部には、観光業関連の協会、中華レストランのシェフによる協会、留学生の協会など、多様な組織が形成されており、移民の増加に伴い集団内部のネットワークも多様化している。アイスランドにおける中国人移民はその規模が小さいため新たな関係を構築する選択肢が限られており、その結果このように、移民同士の相互作用の中で文化活動や経済活動を通じた多重的な関係が形成されているのである。

6. 弱い紐帯の役割：Wechat グループに基づく情報の共有と仕事機会へのアクセス

Wechat グループとは、中国人の間で広く使われているアプリの一つである。このアプリは音声通話や動画通話、メッセージ送受信などの機能に加え、1 対 1 やグループでのチャット機能もある。Wechat のグループチャットでは、最小 3 名から最大 500 名まで招待でき、参加者はそのチャットルーム内で自由に交流できる。

中国人移民の集団内ではいくつかのエスニック組織が形成されており、これらのエスニック組織は Wechat グループを作成し、オンライン空間で日々交流を行っている。Wechat

アイスランドの観光市場における中国人移民

グループ内には、血縁に基づく強い関係を持つ移民がいる一方で、同じ地域に住んでいるがまだ顔を合わせたことがない、あるいはあまり関わりのない移民同士が弱い関係を維持している場合もある。このオンライン空間では多くの参加者が情報をシェアするため、グループメンバーであれば直接面識のない人でも情報にアクセスできる。Shen と He は、Wechat グループに参加している人々の間には「潜在的な紐帯」(Latent ties) が形成されると指摘している (Shen and He 2018: 4)。「潜在的な紐帯」とは、「技術的には存在するが、まだアクティブ化されていないもの」であり、この紐帯は個人によって形成されたものではなく、組織の管理者やシステム管理者、コミュニティの組織者などによって、組織的に形成された構造に依存していると指摘されている (Haythornthwaite 2011)。中国人移民は、Wechat グループに参加することで、グループメンバーとの潜在的なつながりを形成することができる。このように形成された「潜在的な紐帯」は、弱い紐帯に変化することも、また強い紐帯に転換することも可能だと指摘されている (Haythornthwaite 2011)。アイスランドに新しく移住した中国人移民は、Wechat グループに参加することで初めて他の移民と潜在的な繋がりを持つようになる。そして、チャットルーム内での交流を通じて1対1の交流に移ることもできる。例えば、「アイスランド華人華僑協会」の Wechat グループでは、日常的にお金の両替や仕事の募集、無料の家具や服などの情報が共有されている。これらの情報を巡る交流を通じて、グループ内の移民は必要に応じて1対1の交流に移行するのである。

「仕事中、何かの問題が起きた場合、まず私に仕事を依頼した人に聞いてみる。後は自分で色々調べてみる。(略) チャットグループの中でさまざまな問題に関する情報交換があったので、それらを見て私もたくさんの知識を得た。例えば、私がしっかり覚えていなかった情報があれば、チャットグループの中で再度話すことでその情報も得られる」(Y さん, 2020)

「私はアイスランド語と英語がわからなく、グループチャットの中でシェアされる情報は中国語なので、色々と助かっている」(S さん, 2020)

このような Wechat グループによって、中国人移民は中国語で多様な資源にアクセス可能となるのである。そこには、情報の共有とアクセス、ネットワークの拡大という二つの側面がある。集団内での緊密性を強調すると弱い関係の重要性が見失われることに繋がり、情報収集や仕事の機会を獲得するためには弱い紐帯の役割が大きいことが指摘されている (Grannovetter 1973)。Wechat グループ内には主に生活や仕事の情報が掲載されている。生活の情報には、両替、家具廉価での譲渡、文化活動やイベントの情報、トラブル相談などが含まれており、仕事の情報については、関連条件をグループチャットに投稿し興味のある人が連絡をする形でやり取りが行われている。グループ内の情報はメンバーであれば誰でもアクセス可能なため、興味を持った人は情報提供者と1対1のチャットルームで詳細を確認することができる。このような情報共有を通じて、人々は潜在的なつながりから

弱い関係、また弱い関係から強い関係に変更する可能性が開かれているのである (図 1 を参照)。

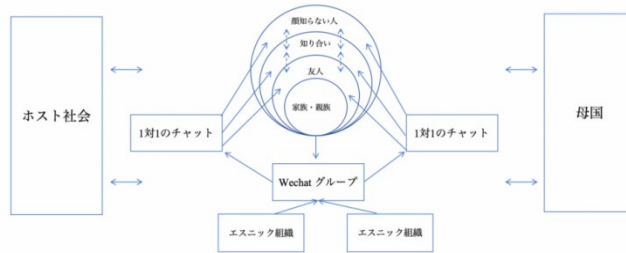


図 1. 移民ネットワークの相互作用のパターン (筆者により作成)

7. 観光市場における中国人移民のエスニック資本の活用と職業的流動性

アイスランドにおける中国人移民集団のエスニック資本は、ホスト社会と母国の影響を受けながら、多重的なネットワークを通じて形成されている。具体的には、移民同士の強いネットワーク (親族や知人)、緩やかなネットワーク (エスニック組織)、そして潜在的なネットワーク (ソーシャルメディアを介した関係) が絡み合うことで、集団内部の情報共有や経済活動が促進されている。このエスニック資本の蓄積には、アイスランドにおける観光業の発展と、中国人観光客の増加に伴う新たな労働市場のニーズが大きく影響している。特に、2010 年以降の観光客の急増により、観光市場が活性化し多様な経済活動が展開されるようになった。その結果、観光市場における在留中国人移民の積極的な参加が促され、移民同士の新たな相互作用が生まれ、エスニック資本のさらなる蓄積に繋がったのである。

観光市場における中国人移民の経済活動の特徴の一つは、小規模な自営業の展開である。観光関連の事業は参入障壁が比較的 low、少ない資本で起業が可能のため、友人同士や家族単位で経営するケースが多い。特に、中国からの観光客の増加により中国人向けサービスの需要が高まり、中国人移民集団内でも小規模な自営業者が増加している (金 2021)。また、こうした自営業の拡大に伴い移民コミュニティ内での雇用機会も創出されており、エスニックネットワークを活用した雇用の循環が生まれている。

観光市場における職業が直面している障壁は、大きく分けて二つある。一つは季節性による雇用の不安定さである。統計データによると、2024 年の中国人訪問者数は、7 月、8 月、12 月、2 月に多く集中しており、それに対して 4 月、5 月、11 月は比較的少なかった。例えば、2 月の訪問者数は 10,874 人であったが、5 月は 3,283 人とどまり、その差は約 3 倍である (Statistics Iceland 2024)。このような季節変動により、観光業の雇用は不安定になりやすい。しかし、中国人移民は需要の変動に応じて本業あるいは副業として観光業に従事することで、柔軟に適應している (金 2021)。特に、副業として観光業に携わる場合、異なる産業間の流動性を高めることが可能となる。

もう一つの障壁は言語や学歴、職務経験の有無など、ホスト社会への適應要件である。一般に、アイスランド語能力の不足や現地での職務経験の欠如は、移民の雇用機会を制限する要因となる。しかし、中国人移民コミュニティ内では中国人移民経営の旅行会社が中

アイスランドの観光市場における中国人移民

国人観光客向けにサービスを提供するため、中国人移民をツアーガイドとして積極的に雇用している。この場合、主な業務は中国語で行われるためアイスランド語能力の必要性は低く、中国人移民が観光業に参入しやすい環境が形成されている。これにより、他の産業から観光業への職業的流動も促される。

このような市場環境の中で、多くの中国人移民が観光業に従事している。彼らはエスニック資本を活用することで、水平移動と垂直移動の両方を実現している。ただし、個々の移民ごとにエスニックネットワークへのアクセス度合いは異なるため、それによって生じる機会と障壁に着目する必要がある (Ryan 2011: 720)。水平移動の側面では、中国人移民は主に中国人観光客向けにサービスを提供しているため、アイスランド語能力や職務経験が不足していても、エスニックネットワークを通じて仕事の情報を得やすく、雇用の機会を獲得しやすいという点がある。また、観光業は季節性の変動が大きく雇用の安定性に欠けるが、中国人移民はエスニック資本を活用することで需要の高い時期に限定して働くことも可能となっている。それでは、中国人移民が観光市場から他の産業へ移動する際に、エスニック資本は継続的に機能するのだろうか。観光市場に中国人移民が集中する前、在留中国人は研究職から非熟練職にいたるまでの多様な職業に従事していた。在留目的別 (First permits by reason) による中国人移民の流入状況を見ると、「就労理由」と「家族理由」をわずかに上回って、「教育理由」が最も多かった (Eurostat 2025)。また「就労理由」は2015年以降「家族理由」を超えていた。就労目的でアイスランドに移住した人に関する詳細な職業分類はないものの、聞き取り調査では中華レストランのコックが代表的な職業として挙げられている。それは観光業の発展に伴う中華レストランの数の増加およびコックたちの他国への流動性による影響を受けている。「家族理由」で移住した人の中では女性の数が男性の倍以上であることから、結婚女性がその主力であることがうかがえる。さらに、聞き取り調査を通じて、留学生が旅行会社で働くケースや結婚女性がツアーガイドとして働くケース、安定的な専門職に就いている人が副業としてツアーガイドとして働くケース、非熟練労働者として働きながら副業としてツアーガイドとして働くケースなど、観光市場に参加する中国人移民の属性は多様になっていることが分かった。このような中国人移民が同じチャットグループのメンバーとなっているのだが、その結果、彼らは観光業以外の職種に関する情報もシェアし、収集することができるのである。エスニックネットワークは移民がアイスランド社会で仕事を見つけるうえで重要な役割を果たしている。しかし一方で、多くの移民が低熟練労働市場に集中する傾向があり、その結果、選択できる仕事に限られているという状況もある。中国人移民の場合も同様に、移民ネットワークを通じて他の就労機会にアクセスできると考えられる。ただし、観光市場においてエスニック資本が果たしていた、雇用の柔軟な調整や言語の優位性などの構造的障壁を緩和する機能は、他の産業に移行するにつれて言語や学歴、経験などの人的資本の不足により限定的になる。

垂直移動の側面では、観光市場での中国人移民の職業的上昇はホスト社会の労働市場における構造的障壁の影響を受けている。ホスト社会の労働市場では移民労働者は特定の低熟練労働市場に集中しやすく、上昇移動の機会が限られている。そのような環境の中で、

中国人移民はエスニック資本を活かし、移民同士が経営する旅行会社においてツアーガイドとして雇用される機会を得ている。そうした機会を活かして中国人移民は一定の職務経験を積み、経済的条件が整えば、エスニックネットワークを活かして知人の移民と協力し新たな旅行会社を営むことが可能となる。このプロセスは、彼らが低熟練労働市場から離脱しより安定した経済的地位を確立するための道筋を示している。

8. アイスランドにおける中国人移民の労働市場への統合：エスニック資本は役にたつのか？

アイスランドでは移民の流入が増加しており、その割合が大きくなるにつれて、多文化社会へと移行していつている。2024 年 5 月に発表された『移民に関する白書：2038 年までの政策草案』（White Paper on Matters of Immigrants: Draft policy to 2038）では移民の包摂を目指すビジョンが掲げられ、移民に対する政府の基本的立場がうかがえる。しかし同年の 7 月に、外国人に関する法改正（Amendments to the Foreign National Act）が発効され、難民を対象とした在留資格の有効期間と更新期間の短縮や家族呼び寄せの制限などの多様な制限措置が導入された。このことから、政府はすでに定住している移民の統合を進める一方で、今後の外国人受け入れに関しては、難民の受け入れについて制限を強化する方向へ移行していることがうかがえる。一方、中央党（Centre Party）や人民党（People's Party）のような反移民を掲げる政党も存在するが、これまでこうした右翼的な反移民ポピュリスト政党が議会で大きな議席を獲得したことはなく、他の北欧諸国に見られるような政治的な影響力には達していなかった（Thorhallsson and Harðarson 2022: 95）。

従って、より積極的に移民を包括しようとするという背景の下で、アイスランドの労働市場における移民の統合の重要性が高まっていると言える。アイスランドを含む北欧諸国は高い雇用率を前提とした福祉制度を備えており、移民が円滑に就職することは公的資金による支援プログラムの負担を軽減する役割を果たす（Calmfors et al. 2019: 12）。また、移民は労働力不足の解消や高齢化の緩和に貢献し、福祉国家の持続的な経済発展を支えている（Peri 2011）。労働市場における移民の統合には、雇用機会の確保と職業的達成といった側面において本国人と同等のレベルに達することが重要である（Wouter 2019: 2 ; Platt et al. 2022: 349）。移民個々の言語能力、在留資格、滞在期間、職業経験、本国人とのネットワークの拡大などの人的資本と社会関係資本の蓄積は、労働市場における職業的成果に大きな影響を及ぼす（Platt et al. 2022: 349）。しかし、エスニック資本がどのように機能し移民の統合に寄与するのかについては、さらなる検討が必要である。特に、同じ労働市場に属する移民集団であっても直面する不利な状況は様々ではない（Phung 2011）。従って、移民個々の特性だけでなく、エスニックコミュニティが置かれた内的・外的環境も並行して考慮する必要がある。

アイスランドでは、外国人の流入と定住の増加を背景に 2007 年に「移民統合政策」（Government Policy on the Integration of Immigrants）が策定された。この政策では、「...すべての住民が平等な機会を享受し、可能な限り多くの分野で積極的に参加できるようにすること」が掲げられた。アイスランドの労働市場における労働者の雇用率は 2024 年に 85.3% となり、OECD 諸国の中で最も高い水準に達しており、その中で移民の雇用率は 83% であ

り (OECD 2024: 8)。ここから、出身地に関係なく移民労働者も積極的に労働市場に参加していることが分かる。しかし、アイスランドは高技能労働市場 (high skill labor market) を有しているものの、移民労働者の多くは建築業や漁業加工工場、観光業などの低熟練労働市場で本国人労働者の不足を補う形で働いている (OECD 2024: 31-34)。職種別に本国人と移民労働者の参加率を比較すると、「専門・科学・技術業サービス業」に従事する本国人と移民の割合は2024年には89.88%対10.12%であり、その差は8倍以上である (Statistics Iceland 2024)。このことから、移民は雇用率こそ高いものの、専門職における割合は限られていることが分かる。その背景には、アイスランド語能力の不足、学歴や技術と職業のミスマッチ、さらには過剰資格などの要因がある (OECD 2024: 8; Júlíusdóttir 2020; Wendt et al. 2020)。その結果、労働市場における移民労働者の参加率は高いものの、人的資本や社会関係資本の不足により専門職への就職やキャリアアップの機会が制限されていると言える。

アイスランドの観光市場における中国人移民の経済活動は、雇用機会の確保と職業的達成を促す役割を果たしている。これが可能となるのは、エスニックコミュニティで蓄積されたエスニック資本が機能しているからである。すなわち、中国人移民がエスニック資本を活用することで、ホスト社会の労働市場における水平移動および垂直移動が可能となり、結果として円滑な統合が進んでいるということである。アイスランドの中国人移民コミュニティは、チャイナタウンのような閉鎖的な形態ではなく、さまざまな背景を持つ中国人移民によって多重的なネットワークが形成されており、比較的開かれた状態である。その一例として、一部の中国人移民は副業として観光業に従事しており、多言語力や経験を活かしながら本業と並行してエスニック資本を活用していることが挙げられる。その結果、中国人移民はエスニック資本を活用しながら積極的に労働市場に参入し、水平移動と垂直移動を実現することができた。これにより、移民集団全体の労働市場への統合が一層促進されたと言えるだろう。

しかし、移民統合政策で示されているように、アイスランド社会への円滑な統合には「アイスランド言語の知識」が決定的な要因となる。一方で、エスニック資本に過度に依存して雇用機会を探すと移民はエスニックコミュニティに留まりがちになり、結果として労働市場への統合ではなく、むしろ排除される可能性がある。特に、少数の中国人移民は、中国語を用いて中国人観光客にサービスを提供し中国語で旅行会社や中華レストランと連絡を取ることができるため、ホスト社会との接点が限定される傾向にある。ただし、全体的に、中国人移民はエスニック資本を活用することで、積極的に観光市場に従事し、結果としてホスト社会の労働市場への統合が進んでいる。

結論

本研究は、アイスランドの観光市場において中国人移民がどのようにエスニック資本を活用して労働市場における構造的障壁を緩和しているのか、そしてそれがホスト社会の労働市場への統合にどのように寄与しているのかを明らかにした。

アイスランドにおける労働市場は移民労働者が低賃金かつ不安定な低熟練市場に集中

しているという構造的障壁を持っているが、その一方で、中国人観光客の急増により観光業における新たな雇用機会が生まれているという現状がある。こうした背景の下で、中国人移民はエスニック資本を活用し、特に中国人観光客向けのサービスに従事することで、雇用機会を確保し職業的成長を遂げている。中国人移民のエスニック資本は、主にエスニック組織や Wechat グループなどのネットワークを通じて蓄積されてきた。これにより、中国人移民同士は必要に応じて他の移民と連携し、潜在的な関係から弱い関係へと、また弱い関係から強い関係へと転換することで、雇用の機会を獲得しているのである。その結果、観光市場における中国人移民は、水平移動と垂直移動を実現することができている。このように、観光業の発展に伴う中国人移民の積極的な参加は彼らの職業的な達成を促しており、最終的にはアイスランド社会における移民の統合を促す重要な要素となっている。

本研究はエスニック資本が移民の労働市場への統合に与える影響を示すとともに、移民自身がそのネットワークをどのように活用して職業的に成長し、社会に統合されるかのダイナミクスを明らかにした。エスニック資本を活用することが移民の職業的な流動性を高め、結果としてホスト社会への統合を促進することに繋がっているのである。ただし、本研究は 2020 年以前に収集したデータに基づく分析であるため、新型コロナがもたらした観光市場への大きな打撃が移民の就労構造に与えた変化について、その新たな動きを説明するには限界があり、継続的な研究が必要であろう。

注

1. 本論文のインタビューデータは主に、2017 年 8 月から 2018 年の 7 月までの 1 年間、アイスランドの首都レイキャヴィクで実施した現地調査に基づいている。調査対象者は主に現地のコミュニティで行われた文化活動への参加を通じて知り合い、また、紹介によって対象者とのネットワークを広げた。調査内容は、中国人移民の就労状況の分析を目的に、彼らがどのように観光業に従事しているのかについて半構造化インタビュー調査を実施するというものである。インタビュー調査はほぼ対面で行い（新型コロナ危機の際には電話で行った）、その内容を録音し、後に逐語録を作成した。質問内容は観光業に従事することになった経緯や使用言語、就労条件などであり、テーマ別に調査内容を分類し、質的に分析した。
2. C さんは、1990 年代に就労目的でアイスランドに渡った男性であり、本業を持ちながら副業として観光市場に参加している。インタビュー調査は対面で行った。
3. W さんは 1980 年代に留学目的でアイスランドに渡った男性であり、本業を持ちながら自営業者として観光市場に参加している。インタビュー調査は対面で行った。
4. Y さんは 2010 年代に留学目的でアイスランドに渡った女性であり、本業として観光市場に従事している。インタビュー調査は電話で行った。
5. S さんは 2010 年代に就労の目的でアイスランドに渡った男性であり、本業として観光市場に従事している。インタビュー調査は対面で行った。

参考文献

1. Adam Horálek, Ter-hsing James Cheng and Liyan Hu (2017) Identity Formation and Social Integration: Creating and Imagining the Chinese Community in Prague, the Czech Republic In: Min

- Zhou (eds.) *Contemporary Chinese Diaspora* 263-284. London: Palgrave Macmillan.
2. Allan M. Williams and C. Michael Hall (2000) Tourism and migration: New relationships between production and consumption. *Tourism Geographies* 2(1): 5-27.
 3. Andreu Rosario, Enrique Claver and Diego Quer (2013) Chinese outbound tourism: New challenges for European tourism. *Enlightening Tourism* 3(1): 44-58.
 4. Baldur Thorhallsson and Ólafur Th. Harðarson (2022) A Political Party System in FLux: Iceland's Political Culture and Smallness. In Fernando Casal Bértoa and Patrick Dumont (eds.) *Party Politics in European Microstates* 88-106, London and New York: Routledge.
 5. Caroline Haythornthwaite (2002) Strong, weak, and latent ties and the impact of new media. *The information society* 18(5): 385-401.
 6. Deborah De Luca (2004) Networks of the Chinese Community in Milan *Revue Européenne des Migrations Internationales* 29-48.
 7. Diego Quer and Jianrong Peng (2022) Chinese outbound tourism segmentation: A systematic review and research agenda. *Journal of China Tourism Research* 18(4): 778-808.
 8. Elke Murdock (2020) Perception of immigration to Iceland: The host country perspective. In Markus Meckl (eds.) *Samfélag fjölbreytileikans: Samskipti heimamanna og innflytjenda á Íslandi* 35-35. Akureyri: Háskólinn á Akureyri.
 9. Giovanni Peri (2011) Immigration and Europe's Demographic Problems: Analysis and Policy Considerations. *CESifo DICE Report* 9(4): 3-8.
 10. Gunnar Thór Jóhannesson and Edward H. Huijbens (2013) Tourism resolving crisis? Exploring tourism development in Iceland in the wake of economic recession. In: Dieter K. Müller (eds.) *New issues in Polar tourism: Communities, environments, politics*, 133-147. London: Springer.
 11. Granovetter, Mark S (1973) The strength of weak ties. *American journal of sociology* 78(6): 1360-1380.
 12. Hao Xiaofei, Xu Shuojing and Zhang Xiaoming (2019) Barrage participation and feedback in travel reality shows: The effects of media on destination image among Generation Y. *Journal of destination marketing & management* 12: 27-36.
 13. Jinghua Xie and Sigbjørn Tveterås (2020) Economic drivers for the Chinese tourists. *Scandinavian Journal of Hospitality and Tourism* 20(2): 110-125.
 14. Josep Ubalde and Amado Alarcón (2020) Immigrant disadvantage in the labour market: the role of attitudinal context. *European Societies* 22(5): 636-658.
 15. Kim Jaeun (2019) Ethnic capital, migration, and citizenship: A Bourdieusian perspective. *Ethnic and Racial Studies* 42(3): 357-385.
 16. 金京 (2021) 「アイスランドにおける中国人移民のコミュニティの形成と発展」『人文学フォーラム』4: 313-327.
 17. 金京 (2021) 「アイスランドの観光業における中国人移民：経済活動の新しい可能性と形態」『華僑華人研究』18: 49-69.
 18. Kracke Nancy and Klug Christina (2021) Social capital and its effect on labour market (mis)

- match: Migrants' overqualification in Germany *Journal of International Migration and Integration* 22(4): 1573-1598.
- 19.Lars Calmfors and Nora Sánchez Gassen (eds.) (2019) *Integrating Immigrants into the Nordic Labor Markets*. Denmark: Nordic Council of Minister.
- 20.Magnfríður Júlíusdóttir and Íris H. Halldórsdóttir (2020) Migrant Workers in Tourism: Challenges of Unions and Workers in the Icelandic Tourism Boom. In: Andreas Walmsley (eds.) *Tourism Employment in Nordic Countries: Trends, Practices, and Opportunities*, 169-193. Switzerland: Palgrave Macmillan.
- 21.Magnfríður Júlíusdóttir, Unnur Dís Skaptadóttir and Anna Karlsdóttir (2013) Gendered migration in turbulent times in Iceland. *Norsk Geografisk Tidsskrift-Norwegian Journal of Geography* 67(5): 266-275.
- 22.Matias Thuen Jørgensen, Rob Law, & Brian Edward King (2018) Beyond the stereotypes: Opportunities in China inbound tourism for second-tier European destinations. *International Journal of Tourism Research* 20(4): 488-497.
- 23.Mario Biggeri, Lisa Braitto, Annalisa Caloffi and Óuanhuai Zhou (2022) Chinese Entrepreneurs and workers at the crossroad: the role of social networks in ethnic industrial clusters in Italy. *International Journal of Manpower* 43(9):1-18.
- 24.Marion Joppe (2012) Migrant workers: Challenges and opportunities in addressing tourism labour shortages. *Tourism Management* 33(3): 662-671.
- 25.Margrét Wendt, Gunnar Thór Jóhannesson and Unnur Dís Skaptadóttir (2020) On the move: Migrant workers in Icelandic hotels. In: Andreas Walmsley (eds.) *Tourism Employment in Nordic Countries: Trends, Practices, and Opportunities*, 123-142. Switzerland: Palgrave Macmillan.
- 26.長友淳 (2008) 「脱領土化されたコミュニティ-オーストラリアクイーンズランド州南東部における日本人コミュニティとネットワーク」大谷裕文 (編) 『文化のグローカリゼーションを読み解く』 185-204. 福岡 : 弦書房.
- 27.Lars Calmfors and Nora Sánchez Gassen (eds.) (2019) *Integrating Immigrants into the Nordic Labour Markets*. Denmark: Nordic Council of Ministers.
- 28.OECD (2024) *Skills and Labour Market Integration of Immigrants and their Children in Iceland, Working Together for Integration*, Paris: OECD Publishing.
- 29.Pierre Bourdieu (1986) The Forms of Capital.In: John G. Richardson (ed) *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education* 241-258. New York: Greenwood Press.
- 30.Lucinda Platt, Javier Polavieja and Jonas Radl (2022) Which integration policies work? The heterogeneous impact of national institutions on immigrants' labor market attainment in Europe *International Migration Review* 56(2): 344-375.
- 31.林南 (2005) 『社会資本-社会構造と行動の理論』 上海人民出版社. (中国語)
- 32.Louise Ryan (2011) Migrants' social networks and weak ties: accessing resources and constructing relationships post-migration. *The sociological review* 59(4): 707-724.
- 33.Shen Cuihua and He Gong (2018) Personal Ties, Group Ties and Latent Ties: Connecting Network Size to Diversity and Trust in the Mobile Social Network Wechat. *Asican Journal of*

Communication 29(1): 18-34.

34. Sholeh A. Maani, Xingang Wang and Alan Rogers (2015) Network Effects, Ethnic Capital and Immigrants' Earnings Assimilation: Evidence from a Spatial, Hausman-Taylor Estimation. *Discussion Paper No. 9308*.

35. Sigrún Ólafsdóttir (2020) How Welcoming Are Icelanders? Attitudes Toward Immigration Over Time and in the European Context. In: Kristín Loftsdóttir (eds.) *Mobility and Transnational Iceland: Current Transformations and Global Entanglements* 229-245. Iceland: University of Iceland Press.

36. Smed Karina Madsen and Ane Bislev (2016) New tourists at old destinations: Chinese tourists in Europe. In: Steen Fryba Christensen (ed.) *Emerging powers, emerging markets, emerging societies* 235-255. London: Palgrave Macmillan.

37. Ted Mouw (2003) Social capital and finding a job: do contacts matter? *American sociological review* 68(6): 868-898.

38. Thora H. Christiansen and Erla Sólveig Kristjánsdóttir (2020) When you are a professional: highly skilled immigrants' experiences of the tension between avowed and ascribed identity. In: Kristín Loftsdóttir (eds.) *Mobility and transnational Iceland: Current transformations and global entanglements* 53-70. Iceland: University of Iceland.

39. Anna Triandafyllidou, Irina Isaakyan and Simone Baglioni (2023) Labour market integration as an interactive process. In: Irina Isaakyan (eds.) *Immigrant and Asylum Seekers Labour Market Integration upon Arrival: NowHereLand* 1-27. Switzerland: Springer.

40. Unnur Dis Skaptadóttir (2019) Transnational Practices and Migrant Capital: The Case of Filipino Women in Iceland. *Social Inclusion* 7(4): 211-220.

41. UNWTO and China Tourism Academy (eds.) (2019) *Guideline for Success in the Chinese Outbound Tourism Market*. Madrid: World Tourism Organization.

42. Viet-Hai Phung (2011) Ethnicity, migration and employment disadvantage under New Labour: reviewing the evidence from the United Kingdom *Policy Studies* 32(5): 497-513.

43. 王望波 (2009) 「エスニック資本の視点からみるアメリカ華人経済の発展」『立命館国際地域研究』 30: 1-13.

44. Wang Xingang and Sholeh A. Maani (2014) Ethnic capital and self-employment: a spatially autoregressive network approach. *IZA Journal of Migration* 3: 1-24.

45. Xiaohua Yang, Elly Yi-Hsuan Ho and Artemis Chang (2012) Integrating the resource-based view and transaction cost economics in immigrant business performance. *Asia Pacific Journal of Management* 29: 753-772.

46. Yuan Cai, Jianyu Ma and Young-Sook Lee (2020) How do Chinese travelers experience the Arctic? Insights from a hedonic and eudaimonic perspective. *Scandinavian Journal of Hospitality and Tourism* 20(2): 144-165.

47. Wouter Zwysen (2019) Different patterns of labor market integration by migration motivation in Europe: the role of host country human capital *International Migration Review* 53(1): 59-89.

48. 山下清海 (2008) 『エスニック・ワールド:世界と日本のエスニック社会』 明石書店.

- 49.周敏, 林閩鋼 (2004) 「エスニック資本とアメリカ華人移民コミュニティの変換」『社会学研究』 3:36-46. (中国語)

アイスランド語簡易語形変化表

(研究ノート)

アイスランド語簡易語形変化表

南澤 佑樹
(大阪大学)

筆者が2025年4月に出版した『アイスランド語文法ハンドブック』の巻末には、当初学習者が語形変化のパターンを一目で確認できるよう語形変化表のまとめを掲載する予定であった。しかしながら、紙幅の都合により掲載することができなかつたため、掲載予定であった語形変化表を一部改変し、本会報にて研究ノートとして公開する。

1. 名詞

1.1 男性名詞

1.1.1 強変化

複数主格で-ar・複数対格で-aをつけるグループ (南澤 2025: 25-26)

	単数	複数	単数	複数
主	hestur 馬	hestar	strákur 男の子	strákar
対	hest	hesta	strák	stráka
与	hesti	hestum	strák (/stráki)	strákum
属	hests	hesta	stráks	stráka

	単数	複数	単数	複数
主	fugl 鳥	fuglar	læknir 医者	læknar
対	fugl	fugla	lækni	lækna
与	fugli	fuglum	lækni	læknum
属	fugls	fugla	læknis	lækna

	単数	複数	単数	複数
主	snjór 雪	snjóar	skór 靴	skór
対	snjó	snjóa	skó	skó
与	snjó	snjóum	skó	skóm
属	snjós (/snjóar)	snjóa	skós	skóa

単数主格形が **-(l)/-(n)n** で終わるグループ (複数主格で **-ar**・複数対格で **-a**) (p.26)

	単数	複数	単数	複数
主	bíll 車	bílar	steinn 石	steinar
対	bíl	bíla	stein	steina
与	bíl	bílum	steini	steinum
属	bíls	bíla	steins	steina

	単数	複数	単数	複数
主	jökull 氷河	jöklar	himinn 天・空	himnar
対	jökul	jökla	himin	himna
与	jökli	jökllum	himni	himnum
属	jökuls	jökla	himins	himna

複数主格で **-ir**・複数対格で **-i** をつけるグループ (p.26-27)

	単数	複数	単数	複数
主	gestur 客	gestir	staður 場所	staðir
対	gest	gesti	stað	staði
与	gesti	gestum	stað	stöðum
属	gests	gesta	staðar	staða

	単数	複数	単数	複数
主	mánuður (暦の) 月	mánuðir	markaður 市場	markaðir
対	mánuð	mánuði	markað	markaði
与	mánuði	mánuðum	markaði	mörkuðum
属	mánaðar	mánaða	markaðar/markaðs	markaða

	単数	複数	単数	複数
主	köttur 猫	kettir	fjörður フィヨルド	firðir
対	kött	ketti	fjörð	firði
与	ketti	köttum	firði	fjörðum
属	kattar	katta	fjarðar	fjarða

	単数	複数	単数	複数
主	þáttur 要素・一部	þættir	sonur 息子	synir

アイスランド語簡易語形変化表

対	þátt	þætti	son	syni
与	þætti	þáttum	syni	sonum
属	þáttar	þátta	sonar	sona

※sonur について、父称・母称の場合には単数主格で son が用いられます。

その他 (p.37)

	単数	複数	単数	複数
主	vetur 冬	vetur	fingur 指	fingur
対	vetur	vetur	fingur	fingur
与	vetri	vetrum	fingri	fingrum
属	vetrar	vetra	fingurs	fingra

	単数	複数	単数	複数
主	fótur 足	fætur	maður 男	menn
対	fót	fætur	mann	menn
与	fæti	fótum	manni	mönnum
属	fótar	fóta	manns	manna

	単数	複数	単数	複数
主	faðir 父	feður	bróðir 兄・弟	bræður
対	föður	feður	bróður	bræður
与	föður	feðrum	bróður	bræðrum
属	föður	feðra	bróður	bræðra

1.1.2 弱変化 (p.38)

	単数	複数	単数	複数
主	skóli 学校	skólar	Ítali イタリア人	Ítalir
対	skóla	skóla	Ítala	Ítali
与	skóla	skólum	Ítala	Ítölum
属	skóla	skóla	Ítala	Ítala

	単数	複数	単数	複数
主	nemandi 学生	nemendur	bóndi 農民	bændur
対	nemanda	nemendur	bónnda	bændur
与	nemanda	nemendum	bónnda	bændum
属	nemanda	nemenda	bónnda	bænda

1.2 女性名詞

1.2.1 強変化

複数主格・複数対格で-ir をつけるグループ (p.27-28)

	単数	複数	単数	複数
主	mynd 絵	myndir	gjöf 贈り物	gjafir
対	mynd	myndir	gjöf	gjafir
与	mynd	myndum	gjöf	gjöfum
属	myndar	mynda	gjafar	gjafa

	単数	複数	単数	複数
主	áætlun 計画	áætlanir	pöntun 予約	pantanir
対	áætlun	áætlanir	pöntun	pantanir
与	áætlun	áætlunum	pöntun	pöntunum
属	áætlunar	áætlana	pöntunar	pantana

複数主格・複数対格で-ar をつけるグループ (p.28)

	単数	複数	単数	複数
主	kinn 頬	kinnar	bygging 建物	byggingar
対	kinn	kinnar	byggingu	byggingar
与	kinn	kinum	byggingu	byggingum
属	kinnar	kinna	byggingar	bygginga

複数主格・複数対格で-ur をつけるグループ (p.28-29)

	単数	複数	単数	複数
主	sæng 掛け布団	sængur	tönn 歯	tennur
対	sæng	sængur	tönn	tennur
与	sæng	sængum	tönn	tönnum
属	sængur	sænga	tannar	tanna

	単数	複数	単数	複数
主	nótt 夜	nætur	bók 本	bækur
対	nótt	nætur	bók	bækur
与	nótt	nóttum	bók	bókum
属	nætur	nóttá / náttá	bókar	bóka

複数主格・複数対格で-r をつけるグループ (p.29)

	単数	複数	単数	複数

アイスランド語簡易語形変化表

主	á 川	ár	brú 橋	brýr
対	á	ár	brú	brýr
与	á	ám	brú	brúm
属	ár	áa	brúar	brúa

	単数	複数	単数	複数
主	kýr 雌牛	kýr	tá つま先	tær
対	kú	kýr	tá	tær
与	kú	kúm	tá	tám
属	kýr	kúa	táar	táa

その他 (p.37)

	単数	複数	単数	複数
主	móðir 母	mæður	dóttir 娘	dætur
対	móður	mæður	dóttur	dætur
与	móður	mæðrum	dóttur	dætrum
属	móður	mæðra	dóttur	dætra

1.2.2 弱変化

単数主格で-a, 単数対格・与格・属格で-u をつけるグループ (p. 38-39)

	単数	複数	単数	複数
主	saga 話・歴史	sögur	peysa セーター	peysur
対	sögu	sögur	peysu	peysur
与	sögu	sögum	peysu	peysum
属	sögu	sagna	peysu	peysa

単数形が全て同じ形のグループ (p. 39)

	単数	複数	単数	複数
主	lygi 嘘	lygar	athygli 注意	-
対	lygi	lygar	athygli	-
与	lygi	lygum	athygli	-
属	lygi	lyga	athygli	-

1.3 中性名詞

1.3.1 強変化

基本語形変化パターンを持つグループ (p. 29-30)

	単数	複数	単数	複数
--	----	----	----	----

主	barn 子供	börn	veður 天気	veður
対	barn	börn	veður	veður
与	barni	börnum	veðri	veðrum
属	barns	barna	veðurs	veðra

	単数	複数	単数	複数
主	hundrað 100	hundrað	sumar 夏	sumur
対	hundrað	hundrað	sumar	sumur
与	hundraði	hundraðum	sumri	sumrum
属	hundraðs	hundraða	sumars	sumra

語末が-i/-éで終わるグループ (p. 30)

	単数	複数	単数	複数
主	epli リンゴ	epli	tré 木	tré
対	epli	epli	tré	tré
与	epli	eplum	tré	trjám
属	eplis	epla	trés	trjáa

1.3.2 弱変化 (p. 39)

	単数	複数	単数	複数
主	auga 目	augu	hjarta 心・心臓	hjörtu
対	auga	augu	hjarta	hjörtu
与	auga	augum	hjarta	hjörtum
属	auga	augna	hjarta	hjartna

1.4 人名 (p. 40)

1.4.1 男性名

主	Ólafur	Sigurður	Örn	Guðni
対	Ólaf	Sigurð	Örn	Guðna
与	Ólafi	Sigurði	Erni	Guðna
属	Ólafs	Sigurðar	Amar	Guðna

1.4.2 女性名

主	Guðrún	Sigríður	Ásdís	Anna
対	Guðrúnu	Sigríði	Ásdísi	Önnu
与	Guðrúnu	Sigríði	Ásdísi	Önnu
属	Guðrúnar	Sigríðar	Ásdísar	Önnu

1.5 既知形 (p. 40-41)

アイスランド語簡易語形変化表

1.5.1 男性名詞

	単数	複数	単数	複数
主	hesturinn その馬	hestarnir	skólinn その学校	skólarnir
対	hestinn	hestana	skólann	skólana
与	hestinum	hestunum	skólanum	skólunum
属	hestsins	hestanna	skólans	skólanna

※表中左が強変化名詞、右が弱変化名詞です。

1.5.2 女性名詞

	単数	複数	単数	複数
主	myndin その絵	myndirnar	sagan その物語	sögurnar
対	myndina	myndirnar	söguna	sögurnar
与	myndinni	myndunum	sögunni	sögunum
属	myndarinnar	myndanna	sögunnar	sagnanna

1.5.3 中性名詞

	単数	複数	単数	複数
主	barnið その子供	börnin	augað その目	augun
対	barnið	börnin	augað	augun
与	barninu	börnunum	auganu	augunum
属	barnsins	barnanna	augans	augnanna

2. 形容詞・副詞

2.1. 形容詞の強変化 (p.43-48)

基本語形変化グループ 1

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	langur 長い	löng	langt	langir	langar	löng
対	langan	langa	langt	langa	langar	löng
与	lögum	langri	lögum	lögum	lögum	lögum
属	langs	langrar	langs	langra	langra	langra

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	saddur 満腹の	södd	satt	saddir	saddar	södd
対	saddan	sadda	satt	sadda	saddar	södd
与	söddum	saddri	söddu	söddum	söddum	söddum

属	sadds	saddrar	sadds	saddra	saddra	saddra
---	-------	---------	-------	--------	--------	--------

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	kaldur 寒 い	köld	kalt	kaldir	kaldar	köld
対	kaldan	kalda	kalt	kalda	kaldar	köld
与	köldum	kaldri	köldu	köldum	köldum	köldum
属	kalds	kaldrar	kalds	kaldra	kaldra	kaldra

-r/-s で終わる形容詞・子音+n で終わるグループ

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	stór 大 き い	stór	stórt	stórir	stórar	stór
対	stóran	stóra	stórt	stóra	stórar	stór
与	stórum	stórrí	stóru	stórum	stórum	stórum
属	stórs	stórrar	stórs	stórra	stórra	stórra

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	ljós 明 る い	ljós	ljóst	ljósir	ljósar	ljós
対	ljósan	ljósa	ljóst	ljósa	ljósar	ljós
与	ljósum	ljósri	ljósu	ljósum	ljósum	ljósum
属	ljóss	ljósrar	ljóss	ljósra	ljósra	ljósra

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	jafn 等 しい	jöfn	jafnt	jafnir	jafnar	jöfn
対	jafnan	jafna	jafnt	jafna	jafnar	jöfn
与	jöfnum	jafnri	jöfnu	jöfnum	jöfnum	jöfnum
属	jafns	jafnrar	jafns	jafnra	jafnra	jafnra

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性

アイスランド語簡易語形変化表

主	hress 元気 な	hress	hresst	hressir	hressar	hress
対	hressan	hressa	hresst	hressa	hressar	hress
与	hressum	hressri	hressu	hressum	hressum	hressum
属	hress	hressrar	hress	hressra	hressra	hressra

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	kyrr 静か な	kyrr	kyrrt	kyrrir	kyrrar	kyrr
対	kyrran	kyrra	kyrrt	kyrra	kyrrar	kyrr
与	kyrrum	kyrri	kyrru	kyrrum	kyrrum	kyrrum
属	kyrrs	kyrrar	kyrrs	kyrra	kyrra	kyrra

男性単数主格形が母音á/ó/ú/ý/æ+語尾-rで終わるグループ

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	hár 高い	há	hátt	háir	háar	há
対	háan	háa	hátt	háa	háar	há
与	háum	hári	háu	háum	háum	háum
属	hás	hárrar	hás	hárra	hárra	hárra

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	nýr 新し い	ný	nýtt	nýir	nýjar	ný
対	nýjan	nýja	nýtt	nýja	nýjar	ný
与	nýjum	nýrri	nýju	nýjum	nýjum	nýjum
属	nýs	nýrrar	nýs	nýrra	nýrra	nýrra

男性単数主格形が-ll/-nnで終わるグループ

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	sæll 幸運 な	sæl	sælt	sælir	sælar	sæl
対	sælan	sæla	sælt	sæla	sælar	sæl
与	sælum	sælli	sælu	sælum	sælum	sælum
属	sæls	sællar	sæls	sælla	sælla	sælla

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	grænn 緑 の	græn	grænt	grænim	grænar	græn
対	grænan	græna	grænt	græna	grænar	græn
与	grænum	grænni	grænu	grænum	grænum	grænum
属	græns	grænnar	græns	grænna	grænna	grænna

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	gamall 古い	gömul	gamalt	gamlir	gamlar	gömul
対	gamlan	gamla	gamalt	gamla	gamlar	gömul
与	gömlum	gamalli	gömlu	gömlum	gömlum	gömlum
属	gamals	gamallar	gamals	gamalla	gamalla	gamalla

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	mikill たくさん の	mikil	mikið	miklir	miklar	mikil
対	mikinn	mikla	mikið	mikla	miklar	mikil
与	miklum	mikilli	miklu	miklum	miklum	miklum
属	mikils	mikillar	mikils	mikilla	mikilla	mikilla

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	lítill 小さい	lítill	lítið	lítillir	lítillar	lítill
対	lítinn	lítill	lítið	lítill	lítillar	lítill
与	lítlum	lítilli	lítlu	lítlum	lítlum	lítlum
属	lítils	lítillar	lítils	lítilla	lítilla	lítilla

語末の-ur が語尾ではないグループ

	単数	複数

アイスランド語簡易語形変化表

	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	dapur 悲しい	döpur	dapurt	daprir	daprar	döpur
対	dapran	dapra	dapurt	dapra	daprar	döpur
与	döprum	dapurri	döpru	döprum	döprum	döprum
属	dapurs	dapurrar	dapurs	dapurra	dapurra	dapurra

2.2 形容詞の弱変化 (p. 48)

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	langi 長い	langa	langa	löngu	löngu	löngu
斜	langa	löngu	langa	löngu	löngu	löngu

2.3 比較

2.3.1 形容詞の原級・比較級・最上級 (p. 198-201)

グループ1 (-ar/-ast-グループ)

原級	比較級	最上級
rikur 金持ちの	ríkari	ríkastur
fyndinn 面白い	fyndnari	fyndnastur
dapur 悲しい	daprari/dapurri	daprastur

グループ2 (-r/-ast-グループ)

fallegur 美しい	fallegri	fallegastur
vinsæll 人気のある	vinsælli	vinsælastur
seinn 遅い	seinni	seinastur
nýr 新しい	nýrri	nýjastur

グループ3 (-r/-st-グループ)

①語幹母音がa/óからe

langur 長い	lengri	lengstur
fagur 美しい	fegurri/fegri	fegurstur
grannur 細い	grennri	grennstur
skammur (時間が) 短い	skemmri	skemmstur
dökkur 暗い	dekkri	dekkstur
þröngur 狭い	þrengri	þrengstur

②語幹母音がá/óからæ

hár 高い	hærri	hæstur
fár 少ない	færri	fæstur

lágur 低い	lægri	lægstur
smár 小さい	smærri	smæstur
stór 大きい	stærri	stærstur

③語幹母音が u から y

ungur 若い	yngri	yngstur
stuttur 短い	styttri	stystur
þungur 重い	þyngri	þyngstur
þunnur 薄い	þynnri	þynnstur

④語幹母音が ú から ý

djúpur 深い	dýpri	dýpstur
mjúkur 柔らかい	mýkri	mýkstur

⑤母音変化なし

mjór 細い	mjórrí	mjóstur
---------	--------	---------

グループ 4 (比較級・最上級の作り方が予測不可能なグループ)

góður 良い	betri	bestur
illur 悪い・怒った	verri	verstur
slæmur 酷い	verri	verstur
vondur 悪い・下手な	verri	verstur
gamall 古い	eldri	elstur
margur 多数の	fleiri	flestur/flestir
mikill 多くの・多量の	meiri	mestur
lítill 小さな	minni	minnstur

形容詞の前に比較級で meira ・最上級で mest をつけるグループ

spennandi 興奮させる	meira spennandi	mest spennandi
-----------------	-----------------	----------------

原級のない形容詞 (カッコ内は対応する副詞)

(austur)	eystri/austari 東の	austastur
(vestur)	vestari/vestri 西の	vestastur
(suður)	syðri 南の	syðstur
(norður)	nyrðri 北の	nyrstur
(fram)	fremri 前 (側) の	fremstur
(aftur)	aftari 後ろ (側) の	aftastur
(fyrir)	fyrri 前の・前者の	fyrstur

アイスランド語簡易語形変化表

(síð/síðla)	síðari 後の・後者の	síðastur
(inn)	innri 内部の・奥の	innstur
(út/utar)	ytri 外部の	ystur
(ofar)	efri 上側の	efstur
(niður/niðri)	neðri 下側の	neðstur
–	heldri 高貴な・傑出した	helstur
–	æðri 高貴な	æðstur
(síður)	síðri 劣った	sístur
–	skárri まだましな	skástur
–	(nærri)	næstur 次の
–	(fjarri)	fjærstur 最奥の・最果ての

2.3.2 比較級の弱変化 (p. 201)

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
全	ríkari	ríkari	ríkara	ríkari	ríkari	ríkari

2.3.3 最上級の強変化 (p. 201)

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	ríkastur	ríkust	ríkast	ríkastir	ríkastar	ríkust
対	ríkastan	ríkasta	ríkast	ríkasta	ríkastar	ríkust
与	ríkustum	ríkastri	ríkustu	ríkustum	ríkustum	ríkustum
属	ríkasts	ríkastrar	ríkasts	ríkustra	ríkustra	ríkustra

2.3.4 最上級の弱変化 (p. 202)

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	ríkasti	ríkasta	ríkasta	ríkustu	ríkustu	ríkustu
斜	ríkasta	ríkustu	ríkasta	ríkustu	ríkustu	ríkustu

2.3.5 副詞の原級・比較級・最上級 (p. 202-203)

グループ1 (-ar/-ast グループ)

oft よく・しばしば	oftar	oftast
sjaldan めったに...ない	sjaldnar	sjaldnast
skemmtilega 面白く	skemmtilegar	skemmtilegast
austur 東へ	austar	austast

グループ 2 (-ar/-st グループ)

norður 北に	norðar	nýrst
suður 南に	sunnar	syðst
inni 中に	innar	innst
niðri 下に	neðar	neðst

グループ 3 (-ra/-st グループ)

langt 遠く	lengra	lengst
hátt 高く	hærra	hæst
þungt 重く	þyngra	þyngst
djúpt 深く	dýpra	dýpst

グループ 4 (-(u)r/-st グループ)

lengi 長い間	lengur	lengst
fjarri 遠く	fjær	fjærst
nærri 近く	nær	næst
-	fremur むしろ	fremst
-	skár ましに	skást

その他

gjarna(n) 喜んで	heldur	helst
illa 悪く	verr	verst
lítið 少し	minna	minnst
mikið かなり・多く	meir(a)	mest
mjög とても	meir(a)	mest
snemma 早く	fyrir	fyrst
varla かろうじて・少 く	síður	síst
vel 良く・上手に	betur	best

3. 動詞

3.1 直説法現在形

3.1.1 弱変化動詞 (p. 18-21)

vera & AR グループ

	vera である		tala 話す	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	ég er	við erum	ég tala	við tölum

アイスランド語簡易語形変化表

2 人称	þú ert	þið eruð	þú talar	þið talið
3 人称	hann er	þeir eru	hann talar	þeir tala

IR グループ

	gera する		segja 言う	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	ég geri	við gerum	ég segi	við segjum
2 人称	þú gerir	þið gerið	þú segir	þið segið
3 人称	hann gerir	þeir gera	hann segir	þeir segja

UR グループ

	velja 選ぶ		leggja (横にして) 置く	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	ég vel	við veljum	ég legg	við leggjum
2 人称	þú velur	þið veljið	þú leggur	þið leggið
3 人称	hann velur	þeir velja	hann leggur	þeir leggja

3.1.2 強変化動詞 (p. 91-92)

UR グループ

	líta 見る・眼を向ける		brjóta 壊す	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	ég lít	við lítum	ég brýt	við brjótum
2 人称	þú lítur	þið lítið	þú brýtur	þið brjótið
3 人称	hann lítur	þeir líta	hann brýtur	þeir brjóta

R グループ

	fá 手に入る・もらう		hlæja 笑う	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	ég fæ	við fáum	ég hlæ	við hlæjum
2 人称	þú færð	þið fáid	þú hlærð	þið hlæið
3 人称	hann fær	þeir fá	hann hlær	þeir hlæja

語尾ゼログループ

	fara 行く		lesa 読む・勉強する	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	ég fer	við förum	ég les	við lesum
2 人称	þú ferð	þið farið	þú lest	þið lesið
3 人称	hann fer	þeir fara	hann les	þeir lesa

語幹が-in/-x で終わる動詞

	skína 輝く		vaxa 成長する・大きくなる	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	ég skín	við skínnum	ég vex	við vöxum
2 人称	þú skín	þið skínið	þú vex	þið vaxið
3 人称	hann skín	þeir skína	hann vex	þeir vaxa

3.2 命令形 (p. 70-71)

3.2.1 短縮命令形 (動詞の語幹の形と同じ)

不定詞	短縮命令形	不定詞	短縮命令形
kaupa 買う	kaup	gera する	ger
segja 言う	seg	telja 数える	tel
kalla 呼ぶ	kalla	tala 話す	tala
skrá 記録する	skrá	ná 届く	ná

3.2.2 命令形 (2 人称単数)

3.2.2.1 接尾辞-ðu をつけるグループ

AR グループ

不定詞	命令形	不定詞	命令形
kalla 呼ぶ	kallaðu	tala 話す	talaðu

短縮命令形が母音あるいは (母音+ f/g(g)/r) で終わる動詞

不定詞	命令形	不定詞	命令形
skrá 記録する	skráðu	æfa 練習する	æfðu
leggja 置く	leggðu	gera する	gerðu

3.2.2.2 接尾辞-du をつけるグループ

短縮命令形が (母音+ l/m(m)/n/ð) で終わる動詞・-ngja で終わる動詞

不定詞	命令形	不定詞	命令形
telja 数える	teldu	gleyma 忘れる	gleymdu
reyna 試す	reyndu	greiða 支払う	greiddu
hengja 掛ける	hengdu	hringja 電話する	hringdu

3.2.2.3 接尾辞-tu をつけるグループ

短縮命令形が (母音+ k(k)/p(p)/s(s)/t(t)) で終わる動詞

不定詞	命令形	不定詞	命令形
leika 遊ぶ	leiktu	vekja 起こす	vektu
hlaupa 走る	hlauptu	læsa 鍵をかける	læstu
mæta 会う	mættu	setja 置く	settu

短縮命令形 (=語幹) が (子音+ d/ð/t) で終わる動詞

不定詞	命令形	不定詞	命令形
synda 泳ぐ	syntu	virða 尊敬する	virtu
snerta 触れる	snertu		

3.2.2.4 個別に覚える必要のあるグループ

不定詞	命令形	不定詞	命令形
fella 落とす	felldu	hella 注ぐ	helltu
brenna 燃やす	brenndu	kynna 知らせる	kynntu
ganga 歩く	gakktu	standa 立つ	stattu
binda 縛る	bittu	þegja 黙る	þegiðu
vera である	vertu		

3.2.3 命令形 (2人称複数)

不定詞	命令形	不定詞	命令形
tala 話す	talið/taliði	segja 言う	segið/segiði

3.3 直説法過去形・完了形

3.3.1 弱変化動詞の直説法過去形 (p. 73-75)

3.3.1.1 接尾辞-(a)ð-をつけるグループ

AR グループの動詞

	borða 食べる		tala 話す	
	単数	複数	単数	複数
1人称	ég borðaði	við borðuðum	ég talaði	við töluðum
2人称	þú borðaðir	þið borðuðuð	þú talaðir	þið töluðuð
3人称	hann borðaði	þeir borðuðu	hann talaði	þeir töluðu

短縮命令形が母音あるいは (母音 + f/g(g)/r) で終わる動詞

	ná 届く		gera する	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	ég náði	við náðum	ég gerði	við gerðum
2 人称	þú náðir	þið náðuð	þú gerðir	þið gerðuð
3 人称	hann náði	þeir náðu	hann gerði	þeir gerðu

3.3.1.2 接頭辞-dをつけるグループ

短縮命令形が (母音 + l/m(m)/n/ð) で終わる動詞・ -ngja で終わる動詞

	greiða 支払う		tengja つなぐ	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	ég greiddi	við greiddum	ég tengdi	við tengdum
2 人称	þú greiddir	þið greidduð	þú tengdir	þið tengduð
3 人称	hann greiddi	þeir greiddu	hann tengdi	þeir tengdu

3.3.1.3 接頭辞-tをつけるグループ

短縮命令形が (母音 + k(k)/p(p)/s(s)/t(t)) で終わる動詞

	keppa 競争する		læsa 鍵をかける	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	ég keppti	við kepptum	ég læsti	við læstum
2 人称	þú kepptir	þið kepptuð	þú læstir	þið læstuð
3 人称	hann keppti	þeir kepptu	hann læsti	þeir læstu

短縮命令形が (子音 + d/ð/t) で終わる動詞

	synda 泳ぐ		virða 尊敬する	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	ég synti	við syntum	ég virti	við virtum
2 人称	þú syntir	þið syntuð	þú virtir	þið virtuð
3 人称	hann synti	þeir syntu	hann virti	þeir virtu

3.3.1.4 個別に覚える必要のあるグループ

	kenna 教える		spenna 張る・緊張させる	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	ég kenndi	við kenndum	ég spennti	við spenntum
2 人称	þú kenndir	þið kennduð	þú spenntir	þið spenntuð
3 人称	hann kenndi	þeir kenndu	hann spennti	þeir spenntu

3.3.2 弱変化動詞の完了形 (p. 78-79)

3.3.2.1 AR グループ

不定詞	完了形	不定詞	完了形
borða 食べる	borðað	tala 話す	talað
kalla 呼ぶ	kallað	elda 料理する	eldað

3.3.2.2 IR グループ

語幹 (短縮命令形と同じ形) に -t をつける動詞

不定詞	完了形	不定詞	完了形
gera する	gert	sýna 見せる	sýnt
þýða 意味する	þýtt	synda 泳ぐ	synt

語幹に-aðをつけるタイプ

不定詞	完了形	不定詞	完了形
brosa 微笑む	brosað	lifa 生きる	lifað
trúa 信じる	trúað	þola 耐える	þolað

3.3.2.3 UR グループ

語幹に-iðをつけるタイプ

不定詞	完了形	不定詞	完了形
telja 数える	talið	skilja 理解する	skilið
velja 選ぶ	valið	vekja 起こす	vakið

語幹に-tをつけるタイプ

不定詞	完了形	不定詞	完了形
flytja 引っ越す	flutt	selja 売る	selt
setja 置く	sett	slökkva 消す	slökkt

3.3.2.4 語幹が母音で終わる (単母音) 動詞 (多くが IR グループの-aで終わる動詞)

不定詞	完了形	不定詞	完了形

skrá 記録する	skráð	spá 予言する	spáð
ná 届く	náð	tjá 表現する	tjáð

3.3.2.5 その他

不定詞	完了形	不定詞	完了形
þiggja 受け取る	þegið	þvo 予言する	þvegið
þegja 黙る	þagað		

3.4 強変化動詞の直説法過去形・完了形 (p. 93-97)

強変化グループ 1 (i - ei - i - i)

	bíta かむ		grípa つかむ	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	ég beit	við bitum	ég greip	við gripum
2 人称	þú beist	þið bituð	þú greipst	þið gripuð
3 人称	hann beit	þeir bitu	hann greip	þeir gripu
完了分詞	hafa bitið		hafa gripið	

強変化グループ 2 (jó/jú(ú) - au - u - o)

	bjóða 提供する		fljúga 飛ぶ	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	ég bauð	við buðum	ég flaug	við flugum
2 人称	þú bauðst	þið buðuð	þú flaugst	þið fluguð
3 人称	hann bauð	þeir buðu	hann flaug	þeir flugu
完了分詞	hafa boðið		hafa flogið	

強変化グループ 3 (e/i/ja(ö/y) - a(ö) - u - o/u)

	sleppa 逃れる		vinna 働く	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	ég slapp	við slappum	ég vann	við unnum
2 人称	þú slappst	þið slappuð	þú vannst	þið unnuð
3 人称	hann slapp	þeir slappu	hann vann	þeir unnu
完了分詞	hafa sloppið		hafa unnið	

	sökva 沈む		syngja 歌う	
	単数	複数	単数	複数

アイスランド語簡易語形変化表

1 人称	ég sökk	við sukkum	ég söng	við sungum
2 人称	þú sökkst	þið sukkuð	þú söngst	þið sunguð
3 人称	hann sökk	þeir sukku	hann söng	þeir sungu
完了分詞	hafa sokkið		hafa sungið	

強変化グループ 4 (e/o - a(o) - á(o) - o/u)

	bera 運ぶ		skera 切る	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	ég bar	við bárum	ég skar	við skárum
2 人称	þú barst	þið báruð	þú skarst	þið skáruð
3 人称	hann bar	þeir báru	hann skar	þeir skáru
完了分詞	hafa borið		hafa skorið	

強変化グループ 5 (e/i/é) - a/á - á - e/é)

	gefa 与える		sitja 座っている	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	ég gaf	við gáfum	ég sat	við sátum
2 人称	þú gafst	þið gáfuð	þú sast	þið sátuð
3 人称	hann gaf	þeir gáfu	hann sat	þeir sátu
完了分詞	hafa gefið		hafa setið	

	sjá 見る		éta 食べる	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	ég sá	við sáum	ég át	við átum
2 人称	þú sást	þið sáuð	þú ást	þið átuð
3 人称	hann sá	þeir sáu	hann át	þeir átu
完了分詞	hafa séð		hafa étið	

強変化グループ 6 (a/e(/á/o/ey/æ) - ó - ó - a/e)

	fara 行く		taka 取る	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	ég fór	við fórum	ég tók	við tókum
2 人称	þú fórst	þið fóruð	þú tókst	þið tókuð
3 人称	hann fór	þeir fóru	hann tók	þeir tóku
完了分詞	hafa farið		hafa tekið	

強変化グループ 7 (指定なし -é/jó- é/u- 不定詞と同じ)

	heita 名前である・約束する		gráta 泣く	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	ég hét	við hétum	ég grét	við grétum
2 人称	þú hést	þið hétuð	þú grést	þið grétuð
3 人称	hann hét	þeir hétu	hann grét	þeir grétu
完了分詞	hafa heitið/heitað		hafa grátið	

	hlaupa 走る		búa 住んでいる	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	ég hljóp	við hlupum	ég bjó	við bjuggum
2 人称	þú hljópst	þið hlupuð	þú bjóst	þið bjugguð
3 人称	hann hljóp	þeir hlupu	hann bjó	þeir bjuggu
完了分詞	hafa hlaupið		hafa búið	

3.5 その他の特殊な動詞の語形変化

語末に-ri をつけて過去形を作る動詞 (p. 79-80)

	róa (オールで) 漕ぐ			
	現在単数	現在複数	過去単数	過去複数
1 人称	ég ræ	við róum	ég reri/réri	við rerum/rérum
2 人称	þú rærð	þið róidð	þú rerir/rérir	þið reruð/réruð
3 人称	hann rær	þeir róa	hann reri/réri	þeir reru/réru
完了分詞	hafa róidð			

アイスランド語簡易語形変化表

	snúa 回す・向きを変える			
	現在単数	現在複数	過去単数	過去複数
1 人称	ég sný	við snúum	ég sneri/snéri	við snerum/snérum
2 人称	þú snýrð	þið snúið	þú snerir/snérir	þið sneruð/snéruð
3 人称	hann snýr	þeir snúa	hann sneri/snéri	þeir sneru/snéru
完了分詞	hafa snúið			

過去・現在動詞 (p. 80-81)

	kunna の仕方を知っている・ができる			
	現在単数	現在複数	過去単数	過去複数
1 人称	ég kann	við kunnum	ég kunni	við kunnum
2 人称	þú kannt	þið kunnið	þú kunnir	þið kunnuð
3 人称	hann kann	þeir kunna	hann kunni	þeir kunnu
完了分詞	hafa kunnað			

	eiga 所有する・した方がよい			
	現在単数	現在複数	過去単数	過去複数
1 人称	ég á	við eigum	ég átti	við áttum
2 人称	þú átt	þið eigið	þú áttir	þið áttuð
3 人称	hann á	þeir eiga	hann átti	þeir áttu
完了分詞	hafa átt			

	þurfa する必要がある			
	現在単数	現在複数	過去単数	過去複数
1 人称	ég þarf	við þurfum	ég þurfti	við þurftum
2 人称	þú þarft	þið þurfið	þú þurftir	þið þurftuð
3 人称	hann þarf	þeir þurfa	hann þurfti	þeir þurftu
完了分詞	hafa þurft			

	vilja したい			
	現在単数	現在複数	過去単数	過去複数
1 人称	ég vil	við viljum	ég vildi	við vildum
2 人称	þú vilt	þið viljið	þú vildir	þið vilduð

3 人称	hann vill	þeir vilja	hann vildi	þeir vildu
完了分詞	hafa viljað			

	mega してもよい			
	現在単数	現在複数	過去単数	過去複数
1 人称	ég má	við megum	ég mátti	við máttum
2 人称	þú mátt	þið megjið	þú máttir	þið máttuð
3 人称	hann má	þeir mega	hann mátti	þeir máttu
完了分詞	hafa mátt			

	muna 覚えている			
	現在単数	現在複数	過去単数	過去複数
1 人称	ég man	við munum	ég mundi	við mundum
2 人称	þú manst	þið munið	þú mundir	þið munduð
3 人称	hann man	þeir muna	hann mundi	þeir mundu
完了分詞	hafa munað			

	vita 知っている			
	現在単数	現在複数	過去単数	過去複数
1 人称	ég veit	við vitum	ég vissi	við vissum
2 人称	þú veist	þið vitið	þú vissir	þið vissuð
3 人称	hann veit	þeir vita	hann vissi	þeir vissu
完了分詞	hafa vitað			

	unna 愛している			
	現在単数	現在複数	過去単数	過去複数
1 人称	ég ann	við unnum	ég unni	við unnum
2 人称	þú annt	þið unnið	þú unnir	þið unnuð
3 人称	hann ann	þeir unna	hann unni	þeir unnu
完了分詞	hafa unnað/unnt			

	munu ...だろう・...かもしれない		skulu ...することになっている	
	現在単数	現在複数	現在単数	現在複数

アイスランド語簡易語形変化表

1 人称	ég mun	við munum	ég skal	við skulum
2 人称	þú munt	þið munuð	þú skalt	þið skuluð
3 人称	hann mun	þeir munu	hann skal	þeir skulu

3.6. 動詞の-st 形 (p. 166-167)

	kallast 呼ばれる			
	現在単数	現在複数	過去単数	過去複数
1 人称	ég kallast	við köllumst	ég kallaðist	við kölluðumst
2 人称	þú kallast	þið kallist	þú kallaðist	þið kölluðust
3 人称	hann kallast	þeir kallast	hann kallaðist	þeir kölluðust
完了分詞	hafa kallast			

	fást 入手できる			
	現在単数	現在複数	過去単数	過去複数
1 人称	ég fæst	við fáumst	ég fékkst	við fengumst
2 人称	þú fæst	þið fáist	þú fékkst	þið fengust
3 人称	hann fæst	þeir fást	hann fékkst	þeir fengust
完了分詞	hafa fengist			

3.7 分詞

3.7.1 現在分詞 (p. 67-68)

不定詞	現在分詞	不定詞	現在分詞
sofa 眠っている	sofandi	vaka 起きている	vakandi

3.7.2 過去分詞 (p. 178-181)

弱変化動詞グループ 1 (AR グループ)

	kallaður 呼ばれた (<kalla)					
	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	kallaður	kölluð	kallað	kallaðir	kallaðar	kölluð
対	kallaðan	kallaða	kallað	kallaða	kallaðar	kölluð
与	kölluðum	kallaðri	kölluðu	kölluðum	kölluðum	kölluðum
属	kallaðs	kallaðrar	kallaðs	kallaðra	kallaðra	kallaðra

弱変化動詞グループ 2 (IR グループ)

sagður 言われた (<segja)						
単数				複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	sagður	sögð	sagt	sagðir	sagðar	sögð
対	sagðan	sagða	sagt	sagða	sagðar	sögð
与	sögðum	sagðri	sögðu	sögðum	sögðum	sögðum
属	sagðs	sagðrar	sagðs	sagðra	sagðra	sagðra

弱変化動詞グループ 3 (UR グループ)

valinn 選ばれた (<velja)						
単数				複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	valinn	valin	valið	valdir	valdar	valin
対	valinn	valda	valið	valda	valdar	valin
与	völdum	valinni	völdu	völdum	völdum	völdum
属	valins	valinnar	valins	valinna	valinna	valinna

seldur 売られた (<selja)						
単数				複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	seldur	seld	selt	seldir	seldar	seld
対	seldan	selda	selt	selda	seldar	seld
与	seldum	seldri	seldu	seldum	seldum	seldum
属	selds	seldrar	selds	seldra	seldra	seldra

強変化動詞

kominn 来た (<koma)						
単数				複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	kominn	komin	komið	komnir	komnar	komin
対	kominn	komna	komið	komna	komnar	komin
与	komnum	kominni	komnu	komnum	komnum	komnum
属	komins	kominnar	komins	kominna	kominna	kominna

過去分詞の弱変化

kallaður 呼ばれた (<kalla)						
単数			複数			
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	kallaði	kallaða	kallaða	kölluðu	kölluðu	kölluðu
斜	kallaða	kölluðu	kallaða	kölluðu	kölluðu	kölluðu

3.8 接続法 (p.208-211)

3.8.1 接続法現在形

	tala 話す		fá 手に入る・もらう	
	現在単数	現在複数	現在単数	現在複数
1 人称	ég tali	við tölum	ég fái	við fáum
2 人称	þú talir	þið talið	þú fáir	þið fáið
3 人称	hann tali	þeir tali	hann fái	þeir fái

3.8.2 接続法過去形

	tala 話す		fá 手に入る・もらう	
	現在単数	現在複数	現在単数	現在複数
1 人称	ég talaði	við töluðum	ég fengi	við fengjum
2 人称	þú talaðir	þið töluðuð	þú fengir	þið fengjuð
3 人称	hann talaði	þeir töluðu	hann fengi	þeir fengju

3.8.3 動詞 vera の接続法

	現在単数	現在複数	過去単数	過去複数
1 人称	ég sé	við séum	ég væri	við værum
2 人称	þú sért	þið séuð	þú værir	þið væruð
3 人称	hann sé	þeir séu	hann væri	þeir væru

3.8.4 動詞の-st 形の接続法

kallast 呼ばれる				
	現在単数	現在複数	過去単数	過去複数
1 人称	ég kallist	við köllumst	ég kallaðist	við kölluðumst
2 人称	þú kallist	þið kallist	þú kallaðist	þið kölluðust
3 人称	hann kallist	þeir kallist	hann kallaðist	þeir kölluðust

fást 入手できる				
	現在単数	現在複数	過去単数	過去複数

1 人称	ég fáist	við fáumst	ég fengist	við fengjumst
2 人称	þú fáist	þið fáist	þú fengist	þið fengjust
3 人称	hann fáist	þeir fáist	hann fengist	þeir fengjust

4. 数詞

4.1 基数 (p. 144-145)

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	einn 1	ein	eitt	einir	einir	ein
対	einn	eina	eitt	eina	einir	ein
与	einum	einni	einu	einum	einum	einum
属	eins	einnar	eins	einna	einna	einna

	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	tveir 2	tvaer	tvö	þrír 3	þrjár	þrjú
対	tvo	tvaer	tvö	þrjá	þrjár	þrjú
与	tveim(ur)	tveim(ur)	tveim(ur)	þrem(ur)	þrem(ur)	þrem(ur)
属	tveggja	tveggja	tveggja	þriggja	þriggja	þriggja

	単数		
	男性	女性	中性
主	fjórir 4	fjórar	fjögur
対	fjóra	fjórar	fjögur
与	fjórum	fjórum	fjórum
属	fjögurra	fjögurra	fjögurra

4.2 序数 (p. 148-149)

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	fyrsti 1 番目の	fyrsta	fyrsta	fyrstu	fyrstu	fyrstu
斜	fyrsta	fyrstu	fyrsta	fyrstu	fyrstu	fyrstu

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	fyrstur	fyrst	fyrst	fyrstir	fyrstar	fyrst
対	fyrstan	fyrsta	fyrst	fyrsta	fyrstar	fyrst

アイスランド語簡易語形変化表

与	fyrstum	fyrstri	fyrstu	fyrstum	fyrstum	fyrstum
属	fyrsts	fyrstrar	fyrsts	fyrstra	fyrstra	fyrstra

※annar は不定代名詞の項目を参照。

4.3 その他の数字に関わる語 (p. 145-147)

	tvennur (ペアで一揃いのものが) 2つの					
	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	tvennur	tvenn	tvennt	tvennir	tvennar	tvenn
対	tvennan	tvenna	tvennt	tvenna	tvennar	tvenn
与	tvennum	tvennri	tvennu	tvennum	tvennum	tvennum
属	tvenns	tvennrar	tvenns	tvennra	tvennra	tvennra

	単数		複数	
主	hundrað 100	hundrað	þúsund 1000	þúsund
対	hundrað	hundrað	þúsund	þúsund
与	hundraði	hundraðum	þúsundi	þúsundum
属	hundraðs	hundraða	þúsunds	þúsunda

	単数		複数	
主	milljón 100万	milljónir	milljarður 10億	milljarðar
対	milljón	milljónir	milljarð	milljarða
与	milljón	milljónum	milljarði	milljörðum
属	milljónar	milljóna	milljarðs	milljarða

5. 代名詞

5.1 人称代名詞 (p. 18, 31)

		1 人称	2 人称	3 人称		
				男性	女性	中性
単 数		私	あなた	彼・それ	彼女・それ	それ
	主	ég	þú	hann	hún	það

	対	mig	þig	hann	hana	það
	与	mér	þér	honum	henni	því
	属	mín	þín	hans	hennar	þess
複 数		私たち	あなたたち	彼ら・それら	彼女ら・それら	彼ら・それら
	主	við	þið	þeir	þær	þau
	対	okkur	ykkur	þá	þær	þau
	与	okkur	ykkur	þeim	þeim	þeim
	属	okkar	ykkar	þeirra	þeirra	þeirra

5.2 所有代名詞 (p. 54)

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	minn 私の	mín	mitt	mínir	mínar	mín
対	minn	mína	mitt	mína	mínar	mín
与	mínum	minni	mínu	mínum	mínum	mínum
属	míns	minnar	míns	minna	minna	minna

※2 人称単数þinn や再帰所有代名詞 sinn も同じ変化パターンです。

1 人称複数	okkar 私たちの	2 人称複数	ykkar あなたたちの
3 人称単数男性	hans 彼の	3 人称単数女性	hennar 彼女の
3 人称単数中性	þess その	3 人称複数	þeirra 彼らの・それらの

5.3 再帰代名詞 (p. 163)

		1 人称	2 人称	3 人称		
				男性	女性	中性
		私	あなた	彼・それ	彼女・それ	それ
単 数	主	ég	þú	-	-	-
	対	mig	þig	sig	sig	sig
	与	mér	þér	sér	sér	sér

アイスランド語簡易語形変化表

	属	mín	þín	sín	sín	sín
複 数		私たち	あなたたち	彼ら・それら	彼女ら・それら	彼ら・それら
	主	við	þið	-	-	-
	対	okkur	ykkur	sig	sig	sig
	与	okkur	ykkur	sér	sér	sér
	属	okkar	ykkar	sín	sín	sín

5.4 指示代名詞 (p. 56, hinn の語形変化は p. 51)

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	þessi この	þessi	þetta	þessir	þessar	þessi
対	þennan	þessa	þetta	þessa	þessar	þessi
与	þessum	þessari	þessu	þessum	þessum	þessum
属	þessa	þessarar	þessa	þessara	þessara	þessara

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	sá その	sú	það	þeir	þær	þau
対	þann	þá	það	þá	þær	þau
与	þeim	þeirri	því	þeim	þeim	þeim
属	þess	þeirrar	þess	þeirra	þeirra	þeirra

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	hinn 他のも の	hin	hitt	hinir	hinar	hin
対	hinn	hina	hitt	hina	hinar	hin
与	hinum	hinni	hinu	hinum	hinum	hinum
属	hins	hinnar	hins	hinna	hinna	hinna

5.5 不定代名詞 (p. 58-60, 188-193)

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	allur 全て	öll	allt	allir	allar	öll
対	allan	alla	allt	alla	allar	öll
与	öllum	allri	öllu	öllum	öllum	öllum
属	alls	allrar	alls	allra	allra	allra

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	sumur いくら か	sum	sumt	sumir	sumar	sum
対	suman	suma	sumt	suma	sumar	sum
与	sumum	sumri	sumu	sumum	sumum	sumum
属	sums	sumrar	sums	sumra	sumra	sumra

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	einhver 誰か・何か	einhver	eitthvert eitthvað	einhverjir	einhverjar	einhver
対	eihvern	einhverja	eitthvert eitthvað	einhverja	einhverjar	einhver
与	einhverjum	einhverri	einhverju	einhverjum	einhverjum	einhverjum
属	eihvers	eihverrar	eihvers	eihverra	eihverra	eihverra

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	nokkur いくつか の	nokkur	nokkurt nokkuð	nokkrir	nokkrar	nokkur
対	nokkurn	nokkra	nokkurt nokkuð	nokkra	nokkrar	nokkur
与	nokkrum	nokkurri	nokkru	nokkrum	nokkrum	nokkrum
属	nokkurs	nokkurrar	nokkurs	nokkurra	nokkurra	nokkurra

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	annar 一方の	önnur	annað	aðrir	aðrar	önnur
対	annan	aðra	annað	aðra	aðrar	önnur
与	öðrum	annarri	öðru	öðrum	öðrum	öðrum
属	annars	annarrar	annars	annarra	annarra	annarra

	複数		
	男性	女性	中性
主	báðir 両方	báðar	bæði

アイスランド語簡易語形変化表

	の		
対	báða	báðar	bæði
与	báðum	báðum	báðum
属	beggja	beggja	beggja

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	ýmis 様々 な	ýmis	ýmist	ýmsir	ýmsar	ýmis
対	ýmsan	ýmsa	ýmist	ýmsa	ýmsar	ýmis
与	ýmsum	ýmissi	ýmsu	ýmsum	ýmsum	ýmsum
属	ýmiss	ýmissar	ýmiss	ýmissa	ýmissa	ýmissa

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	slíkur そのような	slík	slíkt	slíkir	slíkar	slík
対	slíkan	slíka	slíkt	slíka	slíkar	slík
与	slíkum	slíkri	slíku	slíkum	slíkum	slíkum
属	slíks	slíkrar	slíks	slíkra	slíkra	slíkra

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	þvílikur なんと いう	þvílík	þvílíkt	þvílíkir	þvílíkar	þvílík
対	þvílikan	þvílíka	þvílíkt	þvílíka	þvílíkar	þvílík
与	þvílíkum	þvílíkri	þvílíku	þvílíkum	þvílíkum	þvílíkum
属	þvílíks	þvílíkrar	þvílíks	þvílíkra	þvílíkra	þvílíkra

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	sami 同じ	sama	sama	sömu	sömu	sömu
斜	sama	sömu	sama	sömu	sömu	sömu

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	samur	söm	samt	samir	samar	söm
対	saman	sama	samt	sama	samar	söm

与	sömum	samri	sömu	sömum	sömum	sömum
属	sams	samrar	sams	samra	samra	samra

5.6 否定代名詞 (p. 193-195)

	enginn 誰も・何も...ない					
	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	enginn	engin	ekkert	engir	engar	engin
対	engan	enga	ekkert	enga	engar	engin
与	engum	engri	engu	engum	engum	engum
属	einskis	engrar	einskis	engra	engra	engra

	neinn 誰も・何も...ない					
	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	neinn	nein	neitt	neinir	neinar	nein
対	neinn	neina	neitt	neina	neinar	nein
与	neinum	neinni	neinu	neinum	neinum	neinum
属	neins	neinnar	neins	neinna	neinna	neinna

	hvorugur (2つのうちの) ...のどちらもない					
	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	hvorugur	hvorug	hvorugt	hvorugir	hvorugar	hvorug
対	hvorugan	hvoruga	hvorugt	hvoruga	hvorugar	hvorug
与	hvorugum	hvorugri	hvorugu	hvorugum	hvorugum	hvorugum
属	hvorugs	hvorugar	hvorugs	hvorugra	hvorugra	hvorugra

6. 疑問詞 (p. 137-138, 141)

	hver 誰・何・どれ					
	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性

アイスランド語簡易語形変化表

主	hver	hver	hvert / hvað	hverjir	hverjar	hver
対	hvem	hverja	hvert / hvað	hverja	hverjar	hver
与	hverjum	hverri	hverju	hverjum	hverjum	hverjum
属	hvers	hverrar	hvers	hverra	hverra	hverra

	hvor (2つの人・もののうち) どっち・誰・何					
	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	hver	hver	hvort	hverir	hverar	hver
対	hvorn	hvora	hvort	hvora	hverar	hver
与	hvorum	hverri	hvoru	hvorum	hvorum	hvorum
属	hvors	hverrar	hvors	hverra	hverra	hverra

起点	静止点	着点
hvaðan どこから	hvar どこで	hvert どこへ

参考文献

南澤佑樹. 2025. 『アイスランド語文法ハンドブック』. 東京: 白水社.

(公開講演要旨)

アイスランドの観光市場における中国人移民コミュニティ：
新たな経済活動の機会とネットワークに基づくエスニック資本の活用

金 京

(名城大学 非常勤講師)

本発表の目的は、アイスランドの観光市場における中国人移民がエスニック資本の活用を通じて移民の経済活動を制限する諸障壁による影響を低下させ、さらにはそれによりホスト社会への統合にポジティブな影響を与えるのではないかという点について分析することである。本発表の分析は、筆者が 2017 年から 2018 年までの 1 年間のアイスランド滞在中に収集したインタビュー調査のデータに基づいた結果である。

1990 年代末以降の経済発展に伴い、アイスランドでは建築業や漁業などの低熟練市場において本国人の就労離れが進み、それに伴い外国人労働者の需要が高まっている。その需要に応じてポーランドをはじめとするヨーロッパからの移民が大量にアイスランドに渡っており、これまでの移民研究では彼らを対象とするものが多かった。また、アイスランドにおける移民の研究では、労働市場のセグメント化によって外国人労働者が低熟練労働市場に集中している点や、言語能力や学歴といった人的資本の不足あるいはミスマッチによって外国人労働者が専門職から排除されやすいことが指摘されている。また、移民のネットワークが就労に関する情報を提供しているものの、それが移民を低熟練市場に繋ぎ止め、移民の上昇移動を促す力にはなっていないことが明らかされている。

2010 年代以降、アイスランドにおける観光業の急成長に伴い、大量の移民労働者が観光市場で働くようになった。しかし、観光業は季節性の変動の影響を受けるために移民労働者は低賃金で不安定な生活を送っていることが指摘されている。先行研究では、労働市場において移民が直面している構造的障壁が提示され、移民がどのようにその障壁によって低熟練労働市場に集中しているのかが明らかにされている。しかし、観光を通じてグローバル市場とローカル市場の関わりが深まる中で、移民の母国の経済的プレゼンスの向上が移民の経済活動にどのように影響しているのかについての議論は不足している。これまでのアイスランドにおける中国人移民の研究では、中国人移民コミュニティの形成や観光市場における個々の中国人移民の実践などについては議論されてきた。しかし、中国人移民が移民集団レベルでどのようにエスニック資本を活用して観光市場における経済活動を進めているのかについては、まだ議論されていない。

分析の結果、以下の 2 点が明らかになった。まず、中国人移民は観光市場の季節性による不安定性という構造的障壁に直面しているが、中国人移民の経営者は中国人移民のツアーガイドと柔軟で多様な関係を結ぶことで不安定性がもたらす問題を緩和することができるという点である。その背景には、エスニック組織およびエスニック組織が持っている Wechat グループが多様なネットワークを形成するための基盤の確立に貢献しているという実態がある。中国人移民は Wechat グループに参加することで、面識のない移民同士

アイスランドの観光市場における中国人移民コミュニティ

と潜在的な紐帯を結び、チャットルームにおける日々の交流を通じて、1対1の関係を形成し、潜在的な関係から弱い関係へと変換することが可能になる。これにより、中国人移民はネットワークの拡大と共に、エスニック資本を蓄積し、仕事のニーズに応じて柔軟に人を雇用することができているのである。

次に、観光市場における中国人移民は中国人観光客を対象に経済活動を行っており、その需要は中国人移民に雇用機会だけでなく起業の機会を提供しているという点である。特に、建築業や漁業などの低熟練市場と比較すると、観光業における中国人移民は中国語や母国の慣習・文化に関する知識が強みとなり、アイスランド語能力や学歴といった人的資本が限られている中国人移民でも就労の機会を得やすい。アイスランドの労働市場において、移民労働者は常に不利な状況に置かれており、上昇移動が難しくなっている。しかし、観光市場における中国人移民は、エスニック資本を活用することで起業の可能性を広げ、低熟練労働市場からの離脱が可能となる。その結果、中国人移民はエスニック資本を活かして積極的に労働市場に参入するようになっているが、そのことは結果的に彼らの労働市場への統合を促している。その一方で、一部の中国人移民はエスニック資本に過度に依存しホスト社会の言語や文化の習得に積極的ではないという状況もあり、結果としてホスト社会の労働市場において周辺化される可能性もある。

〈公開講演要旨〉

Snorri's Anger: Emotion and the Medieval Self

Úlfar Bragaon

(Prófessor emeritus, Stofnun Árna Magnússonar í íslenskum fræðum)

Íslendinga saga by Sturla Þórðarson is the backbone of the *Sturlunga* compilation of contemporary sagas from about year 1300. The compiler says in his comment on his work that Sturla Þórðarson (1214–1284) told *Íslendinga saga* to his scribes and his telling was based on what he had been told by older men about what had taken place before his days, some written documents and his experience.

Sturla was a nephew of Snorri Sturluson the historian (1179–1241) and his fosterson. Snorri is one of the main characters in the first half of *Íslendinga saga*. Our knowledge of Snorri's life is mainly based on *Íslendinga saga* and *Hákonar saga Hákonarsonar*, which Sturla also composed.

Sturla Þórðarson's relation to Snorri Sturluson, his uncle, was somewhat restrained. He had even an open conflict with him and Órækja, Snorri's son, about the rights to manage the Staðarhóll manor on the west coast of Iceland where Sturla lived. Advised by Snorri, Órækja filed a lawsuit against Sturla. But Sturla won the lawsuit at the Althing.

Sturla describes this lawsuit in details in his *Íslendinga saga* and Snorri's anger when he and Órækja lost the case. The paper deals with the *representation* of Snorri's anger, not its *nature*, and Sturla's blended emotions related to Snorri. Further information will be found in my book *Reykjaholt Revisited: Representing Snorri in Sturla Þórðarson's Íslendinga saga* (Reykjavík: Stofnun Árna Magnússonar í íslenskum fræðum, 2021).

Sturla Þórðarson's relation to Snorri his uncle

According to *Íslendinga saga* Sturla Þórðarson stayed for a long time at Snorri's home at Reykjaholt manor as a boy and a young man. Most likely he was educated there by Snorri and his priests, not least in the law code of the Icelandic commonwealth as Snorri was the lawspeaker at the Althing for many years (1215–1218, 1222–1231). Sturla was emotionally attached to Snorri's family and he called Klængur Bjarnarson (1216–1241), Snorri's stepson, his fosterbrother.

The American scholar Barbara H. Rosenwein writes about *emotional communities*. She says:

An emotional community is a group in which people have a common stake, interests, values, and goals. Thus, it is often a social community. But it is also possibly a 'textual community,' created and reinforced by ideologies, teachings, and common presuppositions. With their very

Snorri's Anger: Emotion and the Medieval Self

vocabulary, texts offer exemplars of emotions belittled and valorized. In the Middle Ages, texts were memorized, made part of the self, and 'lived with' in a way analogous to communing with a friend.

(Barbara H. Rosenwein, *Emotional Communities* (2006), pp. 24–25.)

Sturla was in the same emotional and textual community/traditional community as Snorri, his uncle. *Íslendinga saga* is praised for its objectivity. However, it is possible to identify “prevailing emotional norms” in *Íslendinga saga*, even after allowing for the influence of narrative form and topoi. Thus, in a saga dominated by feuding, there are frequent references to anger and violence, fear and hate. Winning respect is a source of pride, while humiliation brings shame. (see Richard Bauman: “Performance and Honor in 13th-Century Iceland.” (1986)

Sturla Þórðarson was not only the author and the main source of *Íslendinga saga*. He himself becomes a participant in the events of *Íslendinga saga* after reaching adulthood, although he is rarely the focus of the action. He is always referred to, like others in the story, in the third person. By these means, *Íslendinga saga* is presented as history rather than an autobiography or memoirs. History was one of the predominant literary forms in Iceland and Norway in the 12th and 13th centuries, and one of the principal occupations of the intellectuals.

Besides the telling of Örlygsstaðir battle and the burning at Flugumýrr, the climaxes of *Íslendinga saga*, it is in the chapters about Sturla's relation to Snorri that the readers come closest to Sturla's self. It has been claimed by Gunnar Benediktsson who wrote many books about the Sturlung Age (1220–1262) that Sturla the sagawriter is at his best in the chapters about Snorri's last year of life (1240–1241). These chapters express Snorri's anger, sorrow, depression, joy and fear. Here I will only dwell on his anger and shame. Reputation- and honor-seeking behavior must be taken into consideration when discussing anger in the sagas.

The Staðarhóll lawsuit

Sturla Þórðarson lived at Staðarhóll with his family in 1241. He was a young chieftain supported by his half-brother Böðvarr and his powerful in-laws of the Staðarhóll- and Skarð-families. His in-laws were the rightful owners of Staðarhóll. At this time Órækja, the son of Snorri Sturluson, was managing the chieftaincy of Einarr Þorvaldsson, his nephew, in Vatnsfjörðr in the Westfjords. However, Órækja also wanted to live on one of his father's farms in Borgarfjörðr. Snorri did not like his unruly son to live in his neighbourhood. It seems that he steered Órækja's interest toward Staðarhóll manor which Órækja now claimed that Einarr his nephew own by inheritance.

Órækja filed a lawsuit in the name of Einarr as the right owner of Staðarhóll at Þorskafjarðarþing (assembly) in the Westfjords. Snorri Sturluson had sent one of his men, Starkaðr Snorrason, to assist Órækja. And he won the lawsuit at the assembly as Sturla Þórðarson was not there or any of his allies.

There was much at stake for Sturla to keep the Staðarhóll manor which was a big one and had six

outlying farms in the same district. Staðarhóll was worth about 120 hundreds and the six outlying farms in all about the same. An average-size farm was worth about 20 hundreds.

Sturla got an oral information from the priest Páll Hallsson (the brother of Jóriðr Hallsdóttir, Sturla's mother-in-law), who was the claimed owner of the land by inheritance, how he should bring the case to the Althing (reference to tradition). Páll sent his son Sámr to support Sturla at the Althing and he told Sturla also to get support of Gizurr Þorvaldsson the chieftain of the Haukadalr family, as it was his father who had claimed the land long ago for his mother-in-law and her sisters (Páll's grandmother was one of them). Furthermore, Sturla was supported by Ketill Þorláksson chieftain at Kolbeinsstaðr who later became the lawspeaker (code of law). Sturla won the case at Althing, for himself and the owners.

The saga reports that Snorri and Sturla met shortly afterwards: "After Snorri rode from the thing he met Sturla at Viðikjörri, and Snorri accused him of being unnecessarily quarrelsome with his kinsfolk over other people's share." Snorri is angry. The saga does not record Sturla's response. However, it is clear from the narrative that Sturla occupied Staðarhóll with the support of his wife Helga's kinsfolk, and that, with their assistance, he had secured the larger share from this complicated legal tussle with his mentor. By winning the case Sturla has had the upper hand in dealings with his teacher of law and Snorri has lost *honor* in this dealings.

Stephen D. White says: "To display anger about an action publicly is to construe the action as an injury, as a wrongful act causing harm, damage, or loss, as an offense against a person's honor." (*Anger's Past* (1998), p. 140) Further he says: "A disputant's anger should abate either when he avenges his shame by overcoming his enemies or when he makes peace with them, in which case anger and enmity should turn into love." (White, p. 144) After the meeting at Althing in 1241, Órækja came to Staðarhóll manor with 80 men and meant to settle there. Snorri has most likely supported his move. But Sturla got a support from Böðvarr his half-brother and they gathered a group of 360 men against Órækja. And then Órækja gave in and he and Sturla became reconciled. For making Órækja feel better, Snorri Narfason of Skarð, the wealthiest man in the West Iceland and uncle of Helga, Sturla's wife, allowed Sturla to lend Órækja Reykjahólar manor, which Snorri Narfason owned, for stay for a while.

スノッリの怒り—感情と中世の自己

ウルヴァル・ブラガソン (小澤 実 訳)

(アウルトニ・マグヌッソン・アイスランド研究所 名誉教授)

ストゥルラ・ソールザルソンによる『アイスランド人のサガ (*Íslendinga saga*)』は、約 1300 年頃に編纂された同時代のサガ集成である『ストゥルルンガ・サガ』の中核をなす作品です。編纂者は、自身の作業に関するコメントの中で、ストゥルラ・ソールザルソン (1214-1284) が『アイスランド人のサガ』を筆写者たちに語り聞かせたのは、その内容

Snorri's Anger: Emotion and the Medieval Self

が年長者たちから聞いた出来事、書かれた文書、自らの体験に基づいているということです。

ストゥルラは歴史家スノッリ・ストゥルルソン (1179-1241) の甥にして養子でした。スノッリは『アイスランド人のサガ』前半の主要人物の一人です。私たちがスノッリの生涯について知るのには、主にこの『アイスランド人のサガ』と、ストゥルラが編纂した『ホーコン・ホーコンソン王のサガ (*Hákonar saga Hákonarsonar*)』によるものです。

ストゥルラと叔父スノッリの関係は、やや緊張をはらむものでした。彼はスノッリの息子オーレーキャ (*Órækja*) とともに、ストゥルラが住んでいたアイスランド西部のスタザルホール (*Staðarhóll*) 荘園の管理権を巡る争いを公にしました。スノッリの助言に従い、オーレーキャはストゥルラに対して訴訟を起こしましたが、ストゥルラはアルシングでこの訴訟を勝ち得ました。

ストゥルラはこの訴訟の詳細に加えて、スノッリとオーレーキャが裁判に敗れたときにスノッリが露わにした怒りを『アイスランド人のサガ』に記述しています。本稿では、スノッリの「怒り」の性質ではなくその表現を、そしてスノッリに対するストゥルラの複雑な感情に焦点を当てます。さらなる詳細は、私の著書『レイクホルト再訪：ストゥルラ・ソールザルソン『アイスランド人のサガ』におけるスノッリの表象』(アウルトニ・マグヌッソン・アイスランド研究所、2021年)をご参照ください。

ストゥルラ・ソールザルソンと叔父スノッリの関係

『アイスランド人のサガ』によれば、ストゥルラは少年期から青年期にかけて、スノッリの屋敷レイキャホルト (*Reykjaholt*) 荘園で長く過ごしました。彼はおそらくスノッリおよびその配下の司祭たちから教育を受け、とくにスノッリが長年アルシングの「法を述べる者」(1215-1218年、1222-1231年)を務めていたため、アイスランドの法典について学んだと考えられます。ストゥルラはスノッリの家族に愛着を持っており、スノッリの継子クレーングル・ビャルナルソン (*Klængur Bjarnarson*, 1216-1241)を義兄弟と呼んでいます。

アメリカの学者バーバラ・H・ローゼンワインは「感情共同体」についてこう述べています：

「感情共同体とは、人々が共通の利害、価値観、目標を持つ集団である。したがって、しばしば社会的共同体である。しかしまた、イデオロギー、教義、共通の前提によって形成し強化される『テキスト共同体』でもあり得る。テキストはその語彙によって、軽視されたり価値づけられたりする感情の規範を提示する。中世においては、テキストは暗記され、自己の一部となり、友と交わるように『共に生きる』ものであった。」(Barbara H. Rosenwein, *Emotional Communities in the Early Middle Ages*. University of Cornell Press 2006, pp. 24-25)

ストゥルラは、叔父スノッリと同じ感情的そしてテキスト共同体もしくは伝統的共同体に属していました。記述が客観的であると評価されている『アイスランド人のサガ』、物語形式や定型モチーフ(トポス)の影響を考慮したとしても、なお「支配的な感情規範」をそこに見出すことができます。すなわち、争いが支配するこのサガにおいては、怒りや暴

力、恐れ、憎しみへの言及が頻繁に見られます。名誉を得ることは誇りの源であり、屈辱は恥をもたらします (Richard Bauman, “Performance and honor in 13th-Century Iceland”, *Journal of Folklore*, 99 (1986), pp. 131-150)。

『アイスランド人のサガ』の著者であり、主要情報提供者であるストゥルラ・ソールザルソンは、成人後は物語の事件に関与する登場人物にもなりますが、彼がその物語の中心に据えられることは稀です。物語内で彼は常に三人称で語られ、これによりこのサガは自伝や回想録ではなく「歴史」として提示されているのです。歴史は 12 から 13 世紀のアイスランドとノルウェーにおける主要な文学形式の一つであり、知識人の主要な職務でもありました。

『アイスランド人のサガ』のクライマックスであるオルリュグスタジル (Örlygsstaðir) の戦闘やフルグミュール (Flugumýrr) の焼き討ちに加えて、ストゥルラとスノッリの関係を描く章では、読者はストゥルラの内面に最も近づくことができます。ストゥルルンク時代 (1220~1262 年) に関する著作を多数執筆したグンナル・ベネディクトソンによれば、ストゥルラはスノッリの晩年 (1240-1241) を描く章において、作家として最も冴えわたっていると考えられます。これらの章では、スノッリの怒り、悲しみ、落胆、喜び、恐れが表現されています。本稿では、その中でも怒りと羞恥に焦点を当てます。サガにおける怒りを論じるにあたり、名誉や評価を求める行動が重要な前提となります。

スタザルホール訴訟

1241 年、ストゥルラ・ソールザルソンは家族とともにスタザルホール荘園に住んでいました。彼は若き豪族であり、異母兄ボズヴァルおよびスタザルホール家並びにスカルズ家という有力親族の支援を受けていました。スタザルホール荘園の正当な所有者は、彼の妻の親族でした。

一方、スノッリの息子オーレーキヤは、西フィヨルドのヴァトンスフィヨルズル (Vatnsfjörðr) で甥のエイナル・ソルヴァルズソンの地位を代行していましたが、ボルガルフィヨルズル (Borgarfjörðr) にある父の荘園の一つに住みたいと考えていました。スノッリはこの手に負えない息子が自分の近くに住むことを嫌い、オーレーキヤの関心をスタザルホールに向けさせたようです。オーレーキヤは、エイナルがスタザルホールを相続したと主張し、彼の名義で西フィヨルドのソルスカフィヨルズル集会 (Þorskaftafjarðarþing) で訴訟を起こしました。スノッリは部下のスタルカズル・スノッラソンを支援のために派遣し、ストゥルラ側の不在をもって勝訴しました。

スタザルホール荘園は同じ地域に 6 つの従属農地を持つ大荘園であり、ストゥルラにとってそれを保持することが死活問題でした。スタザルホールは約 120 フンドラズの価値があり、従属農地も合計で同程度。当時の平均的な農地の価値は約 20 フンドラズでした。

ストゥルラは義母ヨーレイズルの兄弟である司祭パール・ハッルソンから、伝統に則ったアルシングでの訴訟方法を口頭で教えられました。パールは息子サームルを派遣してストゥルラを支援し、さらにハウカダルル家の豪族ギスル・ソルヴァルズソンの支援も求めるよう助言しました。この土地の相続権を主張したのはギスルの父であり、パールの祖母もその関係者の一人でした。さらに、後に法の宣言者となるコルペインスタズルの豪族

Snorri's Anger: Emotion and the Medieval Self

ケティル・ソルラークソンもストゥルラを支援しました。最終的に、ストゥルラはアルシングで訴訟に勝利し、自身と所有者たちの権利を確保しました。

サガではこの後、スノッリとストゥルラがヴィージキョル (Viðikjörr) で出会い、スノッリが「他人の取り分を巡って親族と不必要に争った」とストゥルラを非難したと記されています。怒っているスノッリに対し、ストゥルラの反応は記録されていません。しかし、物語からはストゥルラが妻ヘルガの親族の支援によりスタザルホールを確保し、法律の師であるスノッリを打ち負かして優位に立ったことが読み取れます。

スティープン・D・ホワイトはこう述べています：

「ある行為に対する怒りを公に示すことは、それを害・損害・損失をもたらす不当な行為として、すなわち個人の名誉を侵害する行為として認識することである。」 (Stephen D. White, "The politics of anger", Barbara Rosenwein (ed.) *Anger's Past*. Cornell University Press 1998, p.140)

さらに彼はこう述べます：

「争いの中の怒りは、敵を打ち負かして恥をそそぐか、和解して怒りと敵意が愛に転じたときに収まるべきである。」 (ibid. p.144)

1241年のアルシング後、オーレーキャは80人の部下を引き連れてスタザルホールに来訪して定住しようとしていました。スノッリが彼を後押ししたのでしょう。ストゥルラは異母兄ボズヴァルの支援を受けて、オーレーキャに対抗するため360人を集めました。結果として、オーレーキャは引き下がり、ストゥルラと和解しました。オーレーキャの機嫌を取るために、ストゥルラの妻ヘルガの叔父でありアイスランド西部一の資産家スノッリ・ナルヴァソンが、自身の所有するレイキャホールラル莊園をオーレーキャに一時貸し与えることを許可しました。

〈公開講演要旨〉

Teaching Icelandic at Universities in Japan from a Historical Perspective: Initial Research Questions and Observations

Branislav Bédi

(Stofnun Árna Magnússonar í íslenskum fræðum)

This contribution presents an early account of first academic encounters between Iceland and Japan, the influence of key individuals introducing and expanding Icelandic Studies in Japan from the late 19th century to the present. The aim is twofold: to identify significant figures who introduced and throughout the history contributed to the expansion of Icelandic Studies at Japanese universities, and to raise an initial research question about the motivation of Japanese university students learning Icelandic today. This contribution builds upon an earlier, shorter version previously published on the homepage of Árnastofnun (Bédi, 2025), and is expanding on the original material with additional information and findings.

From a chronological perspective, the first key scholar introducing Icelandic Studies in Japan was Lafcadio Hearn (1850–1904), a foreigner who later became a Japanese citizen and adopted a Japanese name Yakumo Koizumi (小泉 八雲). According to Parr (2022), Hearn was a British national of Irish father and Greek mother and served as a lecturer at Tokyo Imperial University during 1896–1903. According to Erskine (1922), Hearn spoke English, French, Greek, and Japanese, and had a particular interest in medieval Icelandic literature, through which he learned Old Norse and Icelandic. Furthermore, Hearn gave lectures on *Sturlunga Saga* and *Njál's Saga*, reading them with his students. His lecture on *Hávamál* is important because through this literary work he highlighted the ethical and philosophical elements of Norse mythology, thus helping Japanese students better understand medieval influences on Western literature.

Although the first documented contact between Iceland and Japan occurred in 1904, when Dr. Steingrímur Matthíasson (1876–1948), an Icelandic physician, visited the country only for one day during his steamship travels as a ship doctor Ingvarsdóttir (2017a, pp. 87–88); there are no other records of engagement with the Icelandic language or local communities during his visit.

More significant was the long-term presence of Sr. Steingrímur Octavíus Thorláksson (1890–1977), a West-Icelander born in the United States. According to Ingvarsdóttir (2017a, pp. 92–93), during 1916–1941 he lived in the city of Kobe working as a missionary for the Lutheran Church in America. He was accompanied by his wife, Caroline Kristin Thomas, and their children. Thorláksson played

Teaching Icelandic at Universities in Japan from a Historical Perspective

an important cultural role, notably by hosting Jón Sveinsson (Nonni) and organising visits to various religious communities and schools, which furthered the interest of people in Icelandic society, nature, culture, language, and literature (Ingvarsdóttir, 2022).

In 1906, John Lawrence (ジョン・ローレンス) (1850–1916), a British citizen, was appointed as an English teacher at the Imperial University in Tokyo, where he worked until 1916. According to Flanagan (2017 & 2020), Lawrence played a significant role in promoting English literature and Germanic languages in Japan. Before arriving to Japan, he had studied in Paris, Berlin, and Prague, and had knowledge of Gothic, Old Norse, and Icelandic. His knowledge of Old Norse proved valuable in his teaching, especially when explaining the historical development of the English language.

Professor Sanki Ichikawa (市河三喜) (1886–1979) is another important figure who contributed to the development of Icelandic Studies in Japan. According to Kamiyama (2015), Ichikawa wrote his bachelor's thesis under the supervision of John Lawrence on the historical development of the English preposition “for,” and including references to Old Icelandic. The 256-page thesis earned him the highest honours. After studying in Oxford for three years, where he focused on Old Icelandic pronunciation, Ichikawa returned to Japan and taught English at Tokyo Imperial University from 1916 to 1946. There he introduced students to Old Icelandic literature, read sagas with them, and translated the *Snorra-Edda* in class.

Another notable cultural ambassador was Jón Sveinsson (Nonni) (1857–1944), a Jesuit priest and well-known Icelandic author of children books. Ingvarsdóttir (2017a, p. 97–98) mentions that he spent about 18 months in Japan during 1937–1938 and was based at the Sophia University in Tokyo. Thanks to Thorláksson's hospitality, he visited numerous catholic schools and communities, giving 56 lectures on Iceland and his literary works. He published series of articles that were translated into Japanese and published in the journal *Tokyo Asahi Shimbun*. According to Ingvarsdóttir (2017b, p. 525), one of his most memorable experiences was visiting Professor Ichikawa's class at Tokyo Imperial University, where Japanese students would be reading and translating the *Snorra-Edda*. This experience was later described in a 1941 article by Bjarni Jónsson from Unnarholt and published in a newspaper in Iceland.

In the post-war era, interest in Icelandic Studies continued to grow in Japan. In 1958, Susumu Okazaki (岡崎晋) (1925–2010) became the first Japanese student to receive a scholarship to study Icelandic at the University of Iceland (Heimskimgla, 1958). This marked the beginning of formal academic exchange between the two countries. Until today, Iceland has received 27 students from Japan studying Modern Icelandic. Although Okazaki specialised on teaching Norwegian at Tokai University during 1967–1995, he also contributed to writing a textbook for learning Icelandic, which he co-authored with Tamiji Yokoyama.

Tamiji Yokoyama (横山 民司) (1937-) was another important figure in fostering Icelandic Studies in Japan. According to an article in the Icelandic daily newspaper Morgunblaðið (1992, p. B3), he studied German and Nordic literature and worked as an assistant professor in German and Scandinavian languages at Tokai University during 1965–1992, and later at Mejiro University in Tokyo until his retirement in 2008. Yokoyama authored several textbooks for Japanese students, including beginner books in Danish, Norwegian, Swedish, and Icelandic. He visited Iceland twice to deepen his knowledge of Icelandic language, history, and literature, which he then brought into his teaching in Japan.

Another influential scholar in the later period was Professor Sadao Morita (1928–2012). According to an article in the Icelandic daily newspaper Morgunblaðið (1988, p. 14), he studied Old Icelandic in the U.S. (1951–1952) and later modern Icelandic at the University of Iceland during 1961–1962. From 1970 to 1998, he taught Icelandic and Nordic philology at Waseda University in Tokyo. His Icelandic grammar book (アイスランド語文法) became a foundational resource for Japanese learners.

Institutional support for Icelandic Studies grew in the 1980s with the founding of the Iceland-Japan Society and the Society for Icelandic Studies of Japan, both established in 1981. These organisations provided platforms for collaboration, academic exchange, and cultural outreach.

Today, several universities across Japan offer classes on Modern Icelandic language. To better understand the motivation behind Japanese university students learning Icelandic, an online survey was conducted in May–June 2024. The main research question guiding this inquiry is: *What are students' interests in learning Icelandic and related subjects, or in learning about Iceland more generally?* So far, seventy-eight students from various Japanese universities have participated in the survey. Preliminary findings suggest diverse interests in learning Icelandic ranging from mythology and literature to language structure, culture, and even tourism and study abroad.

In conclusion, Icelandic Studies in Japan were initiated through foreign scholars and continued with the growing interest of Japanese students who later became scholars in this field. As of today, several universities in Japan offer Icelandic courses. These universities are the University of Tokyo, Tokyo University of Foreign Studies, Waseda University, Kanazawa University, Muroran Institute of Technology, Osaka University, and Tokai University.

日本の大学におけるアイスランド語教育を歴史的に考える：
最初の問題設定と考察

ブラニスラウ・ベディ (小澤 実 訳)

Teaching Icelandic at Universities in Japan from a Historical Perspective

(アウルトニ・マグヌッソン・アイスランド研究所)

本報告は、アイスランドと日本の間における最初の学術的交流について、そして19世紀後半から現代にかけて日本におけるアイスランド学の紹介と発展に貢献した主要人物の影響についての初期の記録を提示します。本報告の目的は二つあります。第一に、アイスランド研究を日本の大学に紹介し、その発展に貢献した重要な人物を特定することです。第二に、現代においてアイスランド語を学ぶ日本人大学生の動機について、初期段階の研究課題を提示することです。本報告は、アウルトニ・マグヌッソン研究所のホームページに以前掲載された短縮版 (Bédi, 2025) に基づいており、そこに新たな情報と調査結果を加えることで増補しています。

年代順に見ると、日本にアイスランド学を紹介した最初の重要人物はラフカディオ・ハーン (1850–1904) です。彼は外国人でしたが後に日本国籍を取得し、小泉八雲と名乗りました。Parr の研究 (2022) によれば、ハーンはアイルランド人の父とギリシャ人の母を持つイギリス国籍の人物であり、1896年から1903年にかけて東京帝国大学で講師を務めました。Erskine (1922) によると、ハーンは英語、フランス語、ギリシャ語、日本語を話し、中世アイスランド文学に特別な関心を持っており、それを通じて古ノルド語およびアイスランド語を学んだと言われています。さらに、彼は『ストゥルルンガ・サガ』や『ニヤールのサガ』などを講義しました。彼が『オージンの箴言』について行った講義は特に重要であり、北欧神話における倫理的・哲学的要素を強調することで、日本の学生が西洋文学における中世の影響をより深く理解する一助となりました。

アイスランドと日本の接触に関する最初の記録は、1904年にアイスランド人医師ステイングリームル・マッティーアソン (Steingrímur Matthíasson, 1876–1948) が船医として蒸気船での航海の際に一日だけ日本を訪れたことにさかのぼります (Ingvarsdóttir, 2017a, pp. 87–88)。しかし、この訪問中にアイスランド語を用いての接触や当時の現地社会については記録されていません。

より重要なのは、アメリカ生まれのアイスランド系移民ステイングリームル・オクタヴィウス・ソルラークスソン (Steingrímur Octavíus Thorláksson, 1890–1977) の長期滞在です。Ingvarsdóttir (2017a, pp. 92–93) によると、彼は1916年から1941年まで神戸に住み、アメリカ福音ルーテル教会の宣教師として活動しました。妻のキャロライン・クリスティン・トーマスとその子供たちも同行していました。ソルラークスソンは文化的に重要な役割を果たし、特に作家ヨウン・スヴェインソン (ノンニ) をこの地に迎え、宗教系の学校や地域コミュニティへの訪問を手配することで、日本におけるアイスランド社会、自然、文化、言語、文学への関心を高めました (Ingvarsdóttir, 2022)。

1906年には、ジョン・ローレンス (1850–1916) が英国から東京帝国大学に招聘され、1916年まで英語教師として勤務しました。Flanagan (2017 & 2020) によると、ローレンスは英文学とゲルマン語学の普及に貢献しました。彼は来日以前にパリ、ベルリン、プラハで学び、ゴート語、古ノルド語、アイスランド語の知識を有していました。特に古ノルド語の知識は、英語の歴史的発展を説明する際に重要でした。

市河三喜 (1886–1979) も、アイスランド学の発展に貢献した人物です。Kamiyama (2019)

によると、市河はローレンスの指導のもとで卒業論文を書き、英語前置詞 “for” の歴史的変遷を研究する中で古アイスランド語の文献も参照しました。この 256 ページに及ぶ論文はその年の最優秀賞を受賞しました。その後、3 年間オックスフォード大学に留学し、古アイスランド語の発音を研究した後、1916 年から 1946 年まで東京帝国大学で英語を教えました。授業では学生に古アイスランド文学を紹介し、サガを読み、『スノッリのエッタ』の翻訳を行いました。

もう一人の文化的な橋渡し役は、作家でイェズス会士のヨウン・スヴェインソン (ノンニ) (1857–1944) です。Ingvarsdóttir (2017a, pp. 97–98) によると、彼は 1937 年から 1938 年の約 18 か月間、上智大学を拠点に日本に滞在しました。ソルラークスソンの招きにより、多くのカトリック系学校や共同体を訪問し、アイスランドと自身の作品に関して 56 回講演を行いました。彼の一連の文章は日本語に翻訳され、『東京朝日新聞』に掲載されました。

Ingvarsdóttir (2017b, p. 525) によると、彼が東京帝国大学で市河教授の授業を訪問し、学生たちが『スノッリのエッタ』を読んで翻訳していた様子は、ウンナルホルト出身のビャルトニ・ヨウンソン (Bjarni Jónsson) により 1941 年のアイスランドの新聞で報告されました。

戦後、日本におけるアイスランド学への関心はさらに高まりました。1958 年、岡崎晋 (1925–2010) は、アイスランド大学でアイスランド語を学ぶ奨学金を獲得した最初の日本人学生となりました (Heimskringla, 1958)。これにより両国間の正式な学術交流が始まりました。以後、これまでに 27 人の日本人学生が現代アイスランド語を学ぶためアイスランドを訪れています。岡崎は 1967 年から 1995 年まで東海大学でノルウェー語を教えました。横山民司と共著でアイスランド語の教材を執筆するなど、アイスランド語教育にも貢献しました。

横山民司 (1937–) も、アイスランド学の普及において重要な役割を果たした人物です。Morgunblaðið (1992, p. B3) によると、彼はドイツ語および北欧文学を学び、1965 年から 1992 年まで東海大学で、退職まで目白大学でドイツ語・北欧語を教えました。日本人学生向けに多数執筆した教科書の中には、アイスランド語の初級教材も含まれています。アイスランドを二度訪問して語学、歴史、文学に関する知識を深め、それを教育に生かしました。

それ以降の著名な学者には、森田貞雄 (1928–2011) 教授がいます。Morgunblaðið (1988, p.14) によると、彼は 1951–1952 年に米国で古アイスランド語を学び、1961–1962 年にはアイスランド大学で現代アイスランド語を学びました。1970 年から 1998 年まで早稲田大学でアイスランド語と北歐文献学を教え、彼の著書『アイスランド語文法』は日本人学習者にとっての基本書となりました。

1980 年代には、アイスランド研究への制度的支援も進みました。1981 年には「日本アイスランド協会」と「日本アイスランド学会」が設立され、これらを通じて協力、学術交流と文化普及のための基盤が整えられました。

現在、日本のいくつかの大学では現代アイスランド語の授業が開講されています。日本

Teaching Icelandic at Universities in Japan from a Historical Perspective

の大学生がアイスランド語を学ぶモチベーションを理解するために、私は2024年5月から6月にかけて実施されたオンライン調査を行いました。「日本人大学生がアイスランド語や関連分野、あるいはより一般的にアイスランドそのものに対してどのような興味を持つのか」という研究課題を掲げました。これまでに複数の大学から78人の学生が調査に参加しており、神話や文学、言語構造、文化、さらには観光や留学に関心を持つなど、動機は多様であるという予備的結果が得られています。

結論として、日本におけるアイスランド研究は外国人学者によって始まり、その後、関心を持った日本人学生が研究者となって継承・発展させてきたと言えます。現在では、東京大学、東京外国語大学、早稲田大学、金沢大学、室蘭工業大学、大阪大学、東海大学でアイスランド語の授業が行われています。

References

- Bédi, B. (2025). „Upphaf íslenskra fræða í landi rísandi sólar – Japan (日本)“ *Árnastofnun*, April 8, 2025. Retrieved from: <https://arnastofnun.is/is/utgafa-og-gagnasofn/pistlar/upphaf-islenskra-fraeda-i-landi-risandi-solar-japan-riben>.
- Erskine, J. (1922). *Books and Habits from the Lectures of Lafcadio Hearn*. Heinemann: London. <https://www.gutenberg.org/files/14338/14338-h/14338-h.htm>.
- Flanagan, D. (2017). *The Man Who Came After Soseki*. April 17, 2017. Retrieved on 24 May 2024 from: <http://djflanagan.blogspot.com/2017/04/the-man-who-came-after-soseki.html>.
- Flanagan, D. (2020). *Edging Toward Japan: Tokyo University should celebrate its huge literary talents*. The Mainichi. October 17, 2020. Retrieved on 24 May 2024 from: <https://mainichi.jp/english/articles/20201017/p2a/00m/0na/023000c>.
- Heimskringla (1958). *Erfitt að læra íslensku í Japan*. Retrieved on 24 May 2024 from <https://timarit.is/issue/154769>.
- Ingvarsdóttir, K. (2017a). „Frá Sóleyjum“: *Upphaf samskipta Íslendinga og Japana 1904–1942*. Skírnir 191(1), pp. 80–114. Reykjavík.
- Ingvarsdóttir, K. (2017b). *Samskipti Íslands og Japans eftir síðari heimsstyrjöld: Stjórnmalasamband í 60 ár*. Skírnir 191(1), pp. 501–544. Reykjavík.
- Ingvarsdóttir, K. (2022). The Icelandic Lutheran Synod of America and its missionary in Japan, 1916–1941: Steingrímur Octavius Thorlakson. *Scandinavian-Canadian Studies / Études Scandinaves au Canada*, 29, 1–26. <https://doi.org/10.29173/scancan213>.
- Kamiyama, T. (2019). *Sanki Ichikawa. Father of Historical and Related Studies of English in Japan*. Osaka University Papers in English Linguistics, 19, pp. 1–21. https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/77240/oupel19_001.pdf.
- Morgunblaðið. (1988). *Að er ekkert svo erfitt að læra íslensku segir Sadao Morita, japansku prófessor*, p. 14. Retrieved on 24 May 2024 from: <https://timarit.is/page/>

1687680.

Morgunblaðið (1992). *Stefnumót austurs og norðurs*, p. B3. Retrieved on 24 May 2024 from: <https://timarit.is/page/1763233>.

Parr, P. (2022). *Lafcadio Hearn becomes Koizumi Yakumo in 1890s Japan*. Japan Today. August 26, 2022. Retrieved on 24 May 2024 from: <https://japantoday.com/category/features/japan-yesterday/lafcadio-hearn-becomes-koizumi-yakumo-in-1890s-japan>.

2冊の菅原北欧神話論の刊行をめぐる余滴

(新刊紹介)

2冊の菅原北欧神話論の刊行をめぐる余滴

小澤 実
(立教大学)

2024年に相前後して2冊の北欧神話概論が刊行された。一冊は菅原邦城(日本アイスランド学会監修)『北欧神話入門』(東京書籍)であり、もう一冊は菅原邦城(小澤実解説)『概説・北欧神話』(ちくま学芸文庫)である。東京書籍版は、菅原の筐底に眠っていた、より初学者に向けて書き改めつつあった原稿をご遺族から日本アイスランド学会が受け取り、図版などを配置して蘇らせたものである。ちくま版は、絶版となっていた『北欧神話』(東京書籍、1984)を底本とし、その後の研究を踏まえた小澤の解説をつけたものである。ほぼ同時にこの2冊が刊行されることになった経緯は、ちくま版の解説にしたためてある。両書とも、菅原の原稿に対し後進が付加を行っており、学問の継承という点でも意義深い造りとなっている。ここでは両書の起源でもある1984年の北欧神話論の成立に関わるエピソードを綴っておきたい。

東京書籍版の出版は、松本会員が、東京書籍で教科書執筆に携わっていた加藤玄日本女子大学教授(小澤の大学同期)を通じて、東京書籍に打診した。その話を受けた同編集部は、1984年版の担当者であった寺嶋誠氏に編集を依頼した。寺嶋にしてみれば、40年ぶりに自分の担当した著作に再会した、ということになる。倉嶋雅人というペンネームで西洋史関連の翻訳者としても活躍している寺嶋も、入社もない時期に手がけた『北欧神話』には思い入れがあるということで、刊行当初の話のを伺う機会を得た。

早大仏文を卒業して1977年に東京書籍に入社した寺嶋は、教科書以外の出版にも事業を拡大するという当時の社長の方針で、出版編集部に配属された。「東書選書」というシリーズを刊行することになり、寺嶋は先輩編集者と二人でその任務にあたることになった。シリーズ全体を見て貰えばわかるが、「東書選書」は日本文化が支柱であり、当初は西洋関連の書籍の出版は認めてもらえなかったとのことである。転機となったのは、1981年の上村勝彦『インド神話』(1981)と富田仁『フランス小説移入考』(1981)である。つまり、いずれも日本文化の一部であるが海外の事情をテーマにしている、ということで、版元も分野の拡大に余裕が出たということでもあろう。さらに倉嶋は、シンプソン(早野勝巳訳)『ヴァイキングの世界』(1982)ファン・ウィンター(佐藤牧夫・渡部治雄訳)『騎士』(1982)といった西洋中世関連書籍の刊行を実現させた。

倉嶋の記憶によれば、早野を通じて、1983年に菅原先生による神話単著の企画が持ち込まれた。菅原は倉嶋の手がけた『インド神話』を読んで東京書籍を版元に定めたらしく、当時いくつもあった翻訳書ではなく、また、重訳を通じた山室のような紹介ではなく、日本人による書き下ろしの北欧神話論が必要であることを倉嶋に説いた。倉嶋の記憶という条件はつくが、菅原は大意次のように述べたとのことである。

「東京書籍さんの上村先生の『インド神話』は、ただの翻訳ではなく、日本人学者の書き

おろしとして平易かつ大胆に膨大なインド神話の世界を紹介し、しかも文字だけでなく図版も豊富にあって、巻頭にはカラー口絵もある。私はまさに『インド神話』と同じつくりで、自分の『北欧神話』を出したいんです」

この言葉を聞いて菅原のファンとなった倉嶋は、菅原のアイデアを編集会議にかけ、刊行の了承を取り付けた。編集作業は一筋縄では行かなかったが、一番大変であったのは、当時の活版印刷の字母にはなかった古ノルド語の「ø」を特注で作成したことである。菅原からは2回ダメ出しがあり、3回目で「まあ、いいでしょう」とお許しを得た、とのことである。また、倉嶋自身の編集方針として、研究書である以上索引は絶対に必要であり、索引で引き出した単語は「カタカナ表記のみではなく原綴りを入れること」をルールとしていたので、これも大変であったとのこと。

この話にはまだ続きがある。やはり 2024 年にジェームス・ボールドイン（中島孤島訳；阿部正子現代語訳）『北欧神話 新版』（富山房インターナショナル）が刊行された。『希臘神話及北欧神話（増補縮刷版）』（富山房 大正 8 年）の北欧神話部分および解説を現代語訳したものであるが、この編集担当者が、倉嶋とともに「東書選書」を手がけた先輩編集者であり、刊行の手伝いもしたとのことである。蔵持不三也監修『北欧神話解剖図鑑』（エクスナレッジ）も合わせると、2024 年は北欧神話関連文献の「当たり年」ということになるが、偶然なのか必然なのか、神々のみぞ知る。

彙報

(1) 日本アイスランド学会 2024 年度活動状況

1. ニュースレターを 2 回発行 (2024 年 4 月、2024 年 11 月)
2. ホームページ、メーリングリストの運営 (担当: 竹本統夫会員)
3. 第 44 回総会を 2024 年 5 月 25 日に信州大学ならびに Zoom にて開催

日時: 2024 年 5 月 25 日 (土) 13:00~18:00

場所: 信州大学人文学部 (松本キャンパス) 第四講義室 / Zoom

出席者 17 名: (個人会員: 五十音順、敬称略)

対面: 上倉、伊藤、大宮、小澤、金子、金、酒井、竹本、豊田、林、福原、松本、南澤、中井 (オブザーバー)

Zoom: 入江、堀井、山田

委任状: 17 通

I. 総会 (13:15~14:35)

1. 開会の辞 伊藤 尽会長。
2. 議長選出 豊田一穂会員を議長に選出
3. 議事

(1) 報告事項

(ア) 2023 年度活動報告 (松本 涼事務局長)

- ・ニュースレター発行 (2 回: 2023 年 5 月、2023 年 11 月)
- ・ホームページ、メーリングリストの運営
ホームページの「学会活動」に「歴代会長」「歴代公開講演一覧」を追加し、また会報の目次についても第 42 号まで情報を補完した。
- ・2023 年度総会開催 (2023 年 7 月、信州大学 / Zoom)
- ・『日本アイスランド学会会報』第 42 号の発行 (2023 年 6 月)
2024 年度の会報 43 号については総会後に発行する。
- ・Web サイト強化ワーキンググループ (2023 年 9 月、2024 年 3 月)
Zoom 会議とメールにより、主に会報のオンライン化について検討した。

(イ) 会員消息

下記の会員消息が松本事務局長より報告され、福原会員より自己紹介があった。

入会 (2024 年度) 朱位 昌併会員 福原 遙彦会員

退会 (2023 年度) 堀田 隆一会員

(ウ) 会員名簿について

以下の手順で電子化することが竹本事務局員より報告された。

1. 会員名簿を pdf で作成
2. pdf のセキュリティを設定
 - ・パスワードで保護・暗号化
 - ・コピー、印刷、編集の禁止
3. pdf ファイルを wordpress サーバーにアップロードし、ダウンロード用 URL を取得
4. ダウンロード用 URL をメールリストで会員に共有
5. パスワード (各会員共通) をメールリストで共有 (4 とは別便)
6. メール送信から 2 週間後にサーバーからファイルを削除

(エ) 『新編サガ選集』(仮題) について

小澤会員より、資料に基づき、八坂書房で進行中の『新編サガ選集』(仮題) 全 4 巻刊行企画について報告された。既訳についてはおおよその著作権者と連絡が取れている。次年度からの刊行をめざしているが、構成は現段階のもので変更もありうる。日本アイスランド学会監修となるため、質問等があれば小澤会員まで知らせてほしい。

(2) 協議事項

(ア) 2023 年度会計報告・2024 年度予算案 (報告者: 南澤事務局)

2023 年度会計報告について、南澤事務局より資料に基づき説明があった。懇親会費支出について質問があり、懇親会費については内規として事務局員・公開講演者・学生アルバイト分を学会負担としていること、2023 年度については事務局員 4 名とアルバイト分があり、支出が多くなったことが確認された。その他は報告通り承認された。会計監査については総会後に実施し、承認された (会計監査: 上倉会員)。

2024 年度予算案についても提案通り承認された。

(イ) 会報の投稿規定・執筆要領・著作権ポリシーについて

資料に基づき、松本事務局長より会報の電子公開について提議された。

◎全体方針

2023 年度中に電子公開を行う予定だったが、Web サイト強化ワーキンググループでの協議の結果、J-STAGE への申請にともない規定の整備が必要となり協議すべき事項も多いため、総会で改めて議論することとした。まずは本総会後に発行する第 43 号に投稿規定等を記載し、電子公開を申請したい。その後、順次過去の会報についても公開を進めていく。

著作権についてはクリエイティブ・コモンズの CC BY-NC-SA (商用利用禁止、継承) ライセンスを採用する。これについて以下の議論があった。

- ・学会が論文集を発行する場合などは、商用利用に当たらないのではないか?
 - 学会が出版物を発行し、学会費に還元する以上は商用利用に当たらないのではないか。NPO の活動費と同じような扱い。
 - 出版する際には著作権者に許諾を得る方が安全。CC BY-NC-SA ライセンスでも直接許諾を得れば、商用利用も可能。

彙報

- CC ライセンスは一度付与すると変更はできないが、同じ作品に対して二つのライセンスを付与することは可能。利用範囲を変えたい場合には、別のライセンスを再付与するという対応もできる。
- 学会が論文集を発行するとしても、出版社を介する以上は商用利用になる。ライセンスを変える必要はないが、論文集発行の際には改めて著作権者に許諾を得るという手続きをとり、商用利用もありうるという前提で進めていくほうがよい。

◎投稿規定・著作権ポリシー・執筆要領

山田会員に学会から謝金を支払い原案の作成をお願いした。これについて以下の議論があり、修正を経た上で、投稿規定の改訂ならびに著作権ポリシー・執筆要領の新規作成が承認された。

・会報のサイズ：B5 か A4 か

- B5 のままがよい

紙媒体の発行を続けるなら、B5 のままの方が過去の会報を保管する上では便利。

- A4 の方がよい

電子化するなら A4 の方が PDF の出力に適している。

B5 は日本独自の様式なので、国際基準の A4 に合わせるべきではないか。

1 ページの文字数を増やすと B5 より A4 の方が読みやすい。

⇒J-STAGE 登録もあり当面事務作業が増えるので、A4 へのサイズ変更については電子公開が終わってから改めて検討することとなった。合わせて、現状では事務局が編集作業の大半を担っているが、費用をかけて出版社・印刷所に任せる方法も検討する。

- ・フォントは 10.5pt、1 ページの行数は 34 行に増やす。今後も引きつづき検討。

・著者の所属先・連絡先の記載

従来記載していなかったが、学術誌の慣例に従い記載することとする。独立研究者に関しては「独立研究者」や「日本アイスランド学会員」等で対応する。

著者の連絡先（メールアドレス）も任意で記載する。CC で継承されていく中で、著作権者への連絡がとりやすくなるため。

(イ) 懇親会の学生割引について

松本事務局長から、学生会員が減っていることもあり、学生会員の懇親会費を割引し差額を学会が負担することを検討したいとの提案があった。従来は公開講演者・事務局員・学生アルバイトの懇親会費を無料とし学会が補填していたが、学生会員についても割引を適用することが承認された。

(ウ) 次期会長・事務局員の選出

立候補は出なかったため、現事務局から以下の候補者が推薦され、承認された。

会長 小澤 実 (おざわ みのる) 会員

事務局長 林 邦彦 (はやし くにひこ) 会員

日本アイスランド学会会報 44 号 (2025 年)

事務局員 上倉 あゆ子 (あげくら あゆこ) 会員

これにより事務局所在地が立教大学 (〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1 立教大学文学部 小澤実研究室内)、および会計代表責任者が上倉あゆ子会員となった。

(エ) その他

松本会員より、谷口幸男訳『アイスランド サガ』の復刊である『【新版】アイスランド サガ』が新潮社より 6 月 17 日に刊行されることが報告された。また、昨年度の学会で報告された菅原邦城先生のご遺稿についても東京書籍から近日刊行されることが報告された。

豊田会員より、阪西紀子先生の蔵書について、アイスランドに関わっている方に寄贈したいという一橋大学のご遺族のご希望が伝えられた。総会後に蔵書リストを共有するので、希望図書について豊田会員に連絡してほしい。一橋大学のご厚意で着払いにより送付可能。

4. 閉会の辞 小澤 実次期会長

II. 公開講演 (14:50~18:00)

金 京氏 (愛知大学国際中国学センター研究員)

「アイスランドの観光市場における中国人移民コミュニティ：
新たな経済機会とネットワークに基づくエスニック資本の活用」

Dr. Branislav Bédi (Verkefnisstjóri / Project Manager, Stofnun Árna Magnússonar í íslenskum fræðum)

“Teaching Icelandic at universities in Japan from a historical perspective:
initial research questions”

Dr. Úlfar Bragason (Prófessor emeritus, Stofnun Árna Magnússonar í íslenskum fræðum)

“Snorri’s Anger”

III. 懇親会 (19:00~)

会場：馬刺しバル 新三よし 松本本店

4. 『日本アイスランド学会会報』第 43 号を発行 (2024 年 8 月、編集担当：松本 涼)

(2) 2024 年度会員活動状況

<朱位昌併>

◎ [翻訳]

1. ブリアン・ピルキングトン『13 人のサンタクロース アイスランドにつたわるクリスマス』(ゆぎ書房、2024) .

2. ラウン・フリーゲンリング『世界ではじめての女性大統領のはなし』(平凡社、2024).
- ◎ [監修]
3. 小原佐和子『アイスランド(現地取材!世界のくらし 19)』(ポプラ社、2024) .

<小澤 実>

◎ [共著]

1. 西洋中世学会編『西洋中世文化事典』(丸善出版、2024)「刊行にあたって」(i-ii) ; 「海」(16-17頁) ; 「一神教(アブラハム宗教)と暦」(316-319頁) ; 「政治思想と中世」(570-571頁) ; 「ツーリズムと中世」(574-575頁) ; 「展覧会とカタログの中の中世」(584-585頁) ; 「中世とグローバルヒストリー」(600-601頁) .
2. 田中千恵子編『西洋文学にみる魔術の系譜』(小鳥遊書房、2024)「北欧中世のルーン魔術」(62-82頁) .
3. 菅原邦城『概説・北欧神話』(ちくま学芸文庫、2024)「解説:菅原邦城『北欧神話』(一九八四)と北欧神話研究」(356-388頁) .
4. 村井誠人編『スウェーデンを知るための64章【第2版】』(明石書店、2024)「第12章 スウェーデン・ヴァイキングと東方:ユーラシア西部に広がるスウェーデン」(90-94頁) ; 「第13章 総合芸術としてのルーン石碑:ヴァイキングの美術」(95-99頁) ; 「第16章 北方のルネサンス:オーラウス・マグヌスの著述活動」(110-114頁) .
5. 村井誠人編『デンマークを知るための70章【第2版】』(明石書店、2024)「第17章 デンマークの誕生とクヌートと海上支配:グローバルな中世のヴァイキング」(104-108頁) ; 「第18章 海上王国としての中世デンマーク:コペンハーゲンと連合体制」(109-113頁) ; 「第43章 サクソ・グラマティクスの世界:中世ラテン語からデンマーク語へ」(231-235頁) .

◎ [論考]

6. 「歴史創作の現場に聞く!佐藤二葉『アンナ・コムネナ』・アニメ『ヴィンランド・サガ』・歴史考証」(佐藤二葉、大谷哲と共著)『史苑』85-2(2025):123-167頁.
7. 「危機を前にした人間:西洋中世における環境・災害・心性」『西洋中世研究』16(2024):3-7頁.
8. 「ヴァイキングとジェンダー研究:初期中世北欧をめぐる自然科学・考古学・文献史学の展開」『東海史学』58(2024):1-16頁.
9. 「序(特集:グローバルヒストリーと中世ヨーロッパ(3):インド洋と世界システム論)」『史苑』85-1(2024):45-50頁.

◎ [翻訳]

10. ヨハネス・プライザー=カペラー(小澤実訳)「紀元千年転換期におけるグローバルな終末?ビザンツ世界と日本における10-11世紀の気候変動、天体现象、社会的・政治的動乱」『西洋中世研究』16(2024):29-55頁.

◎ [雑考]

11. 『読書アンケート2024』(みすず書房、2025)、「2024読書アンケート」(2-4頁) .
12. 「巡礼とアルプス」『エ芸青花』20(2024):57-59頁.

13. 「閑話休題：西洋中世に遡る制度を描き出した映画『教皇選挙』」『NewsPicks『西洋中世文化事典』を楽しむ！！』 (2025 online) .
14. 「閑話休題：『中世の華・黄金テンペラ画—石原靖夫の復元模写』@目黒区立美術館」『NewsPicks『西洋中世文化事典』を楽しむ！！』 (2025online) .
15. 「閑話休題：中世ヨーロッパを舞台にした『映画ドラえもん のび太の絵世界物語』」『NewsPicks『西洋中世文化事典』を楽しむ！！』 (2025online) .
16. 「西洋中世をグローバルに考える」『NewsPicks『西洋中世文化事典』を楽しむ！！』 (2025online) .
17. 「西洋中世の世界へ、ようこそ」『NewsPicks『西洋中世文化事典』を楽しむ！！』 (2024online) .
18. 「ルーン文字の遍歴：第 12 回：ルーン文字とナチズム」『研究社 Web マガジン Lingua』 (2025online) .
19. 「ルーン文字の遍歴：第 11 回：博物学から近代ルーン学へ：ルズヴィ・ヴィマーと文献学」『研究社 Web マガジン Lingua』 (2024online) .

<清水育男>

◎ [共著]

1. 村井誠人編『スウェーデンを知るための 64 章【第 2 版】』(明石書店、2024)「第 5 章 北欧語のなかのスウェーデン語の位置—スウェーデン語とはどんな言語？—」(44-50 頁) ; 「第 6 章 英語 Farewell の語源は「良き旅を！」か？—スウェーデン語からみえてくる「運」—」(51-54 頁) ; 「第 7 章 スウェーデン語からフィンランド語への借用語—借用語が示す古くからの密接な関係—」(55-58 頁) ; 「第 8 章 スウェーデン語とロシア語との言語接触—国名「ロシア」はスウェーデン語？—」(59-62 頁) ; 「コラム 4 国名が常に自国語とは限らない！」(63-64 頁) ; 「第 57 章 フィーカの作法—スイーツを食べるにも順番がある—」(318-322) .

◎ [論考]

2. 「アイスランド語の前置詞 *an/ón* <~なしに>の語源とその成立過程について」大阪大学 人文学研究科 外国語学専攻 デンマーク語・スウェーデン語研究室『IDUN—北欧研究—』25 (2024) : 39-53 頁.

<林 邦彦>

◎ [論考]

1. 「『マントのルームル』と『トリストラムとイーソッドのサガ』」『埼玉女子短期大学研究紀要』51 (2025) : 47-76 頁.

◎ [翻訳]

2. 「『トリストラムとイーソッドのサガ』」『埼玉女子短期大学研究紀要』51 (2025) : 99-133 頁.

◎ [雑考]

3. 「〈公開講演要旨〉アイスランドのハムレット——『アムロージのサガ』における人物

彙報

造形と信仰——』『日本アイスランド学会会報』43 (2024) : 23–24 頁.

<松本 涼>

◎ [監修]

1. 谷口幸男訳・松本涼監修『【新版】アイスランド サガ』(新潮社、2024) .

◎ [編集協力]

2. 菅原邦城訳『北欧神話入門』(日本アイスランド学会として編集協力) (東京書籍、2024) .

◎ [共著]

3. 西洋中世学会編『西洋中世文化事典』(丸善出版、2024) 「サガと北方文化圏」(390–391 頁) ; 「西洋中世と日本のサブカルチャー」(564–567 頁、小宮真樹子と共著) .

◎ [雑考]

4. 「〈公開講演要旨〉中世アイスランドから眺める映画『ノースマン』」『日本アイスランド学会会報』43 (2024) : 25–27 頁.

<南澤佑樹>

◎ [共著]

1. 村井誠人編『スウェーデンを知るための64章【第2版】』(明石書店、2024) 「第11章 スウェーデン語と日本語の類似点——öga 〈目〉に関する比喻表現の観点から」(66–69 頁) .

◎ [論考]

2. "Case government of the Icelandic preposition án," Íslenskt mál og almenn málfræði 45 (2024) , 85–109. Reykjavík: Íslenska málfræðifélagið.
3. 「スウェーデン語の前置詞 framför の用法について」大阪大学 人文学研究科 外国語学専攻 デンマーク語・スウェーデン語研究室『IDUN—北欧研究—』25 (2025) : 11–25 頁.

<山田慎太郎>

◎ [口頭発表 (単独)]

1. "Construction and Potential Applications of a Knowledge Graph of Medieval Icelandic Sagas: Aiming Towards Analysis of Problem-Solving Dynamics in Íslendinga Saga", Digital Humanities in the Nordic and Baltic Countries 2025, March 4th, 2025.

◎ [口頭発表 (共同)]

2. 山田慎太郎、小川潤、大向一輝「ChatGPT を用いた人名・地名エンティティの自動抽出～生成 AI を活用した中世アイスランド・サガの知識グラフ構築にむけて～」人文科学とコンピュータシンポジウム (じんもんこん)、2024年12月8日.
3. Shintaro Yamada, Jun Ogawa, Ikki Ohmukai, "Modeling Social-Historical Knowledge Graphs for Medieval Icelandic Sagas", The 13th Conference of Japanese Association for Digital Humanities, September 19th, 2024.
4. Shintaro Yamada, Jun Ogawa, Ikki Ohmukai, "Representing the Íslendinga Saga As Knowledge Graphs of Events and Social Relationships: Developing Workflows Based on a Pilot Case",

Digital Humanities in the Nordic and Baltic Countries 2024, May 30th, 2024.

◎ [論文]

5. 「ChatGPT を用いた人名・地名エンティティの自動抽出～生成 AI を活用した中世アイスランド・サガの知識グラフ構築にむけて～」(小川潤、大向一輝との共著)『じんもんこん 2024 論文集』(2024) : 329-334 頁.

◎ [雑考]

6. 「DHNB2024 とアイスランドにおける DH 研究動向」『人文情報学月報』156-2、2024 年 7 月 31 日 (online) .
7. 「(新刊紹介) 高橋美野梨編『グリーンランド——人文社会科学から照らす極北の島——』『史学雑誌』133-6 (2024) : 101-102 頁.

(3) 会員の異動 (敬称略)

入会 : 朱位 昌併、福原 遙彦

日本アイスランド学会会則

日本アイスランド学会会則

(2020年8月29日改定)

第1章 総則

- 第1条 本会は「日本アイスランド学会」(Society for Icelandic Studies of Japan, Félag íslenskra fræða í Japan)と称する。
- 第2条 本会はアイスランドに関する研究(注)の進歩・発展に寄与することを目的とする。
- 第3条 本会は、第2条に掲げた目的を実現するため、諸種の研究集会および機関誌その他の学術図書の刊行などの活動を行う。

第2章 会員

- 第4条 本会の会員は、個人会員と法人会員の2種とする。
- 第5条 個人会員は、本会の主旨に賛成する者で、当該年度の会費を添えて入会申込書を提出した者とする。
- 第6条 法人会員は、本会の主旨に賛成する法人で、当該年度の会費を添えて入会申込書を提出した者とする。なお、法人会員は定例会員総会の構成員となることができない。
- 第7条 会員は、定められた年会費(注)を納入するものとする。
- 第8条 会員は申し出によって退会することができる。会費を1年間納入しない場合は、当該年度の終わりををもって会員の資格を失う(注)。
- 第9条 会員は、諸種の会合および活動の通知を受け、機関誌の配布を受ける。また、活動に参加することができる。

第3章 役員

- 第10条 本会に次の役員を置く。
 - 会長 1名
 - 事務局長 1名
 - 事務局員 若干名
- 第11条 役員は、総会における個人会員の互選による。役員の任期は2年とし、続けて再任されないものとする。

第4章 会議

- 第12条 定例会員総会は、年に1回会長が召集する。なお、総会議長は個人会員中より会長が推薦し、総会が承認する。
- 第13条 総会は委任状を含む個人会員の2分の1以上の出席をもって成立し、諸種の事項（注）を決定する。

第5章 会計

- 第14条 本会の経費は、会費、補助金、寄付金などをもって当てる。
- 第15条 会長は、予算案及び決算報告書を作成し、総会に提案あるいは報告してその審議承認を得なければならない。
- 第16条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第6章 会則の改正

- 第17条 本会の会則の改正は、定例総会において出席会員の3分の2以上の賛成を得て行うものとする。

注記

- 第2条 「アイランドに関する研究」について
アイランドの言語・社会・歴史・文化に関連する他の諸国についての研究も含むものとする。
- 第7条 年会費について
個人会員（一般）4,000円
個人会員（学生）2,000円
個人会員（65歳以上で現職にない者）2,000円
法人会員 30,000円
- 第8条 再入会について
会費未納によって退会となった者が再入会を希望する場合には、未納分会費と再入会となる年度の会費を納入しなければならない。
- 第13条 「諸種の事項」について
 - (1) 役員を選任に関する事。
 - (2) 予算案および決算報告書の承認に関する事。
 - (3) 活動計画および活動報告に関する事。
 - (4) その他本会の運営の基本に関する事。

『日本アイスランド学会会報』投稿規定

『日本アイスランド学会会報』投稿規定

(2024年5月25日改訂)

1. [投稿資格]

投稿は本学会員（以下、会員）で年会費を納めている者に限る。ただし、共著の場合は筆頭著者が会員であれば投稿できるものとする。

2. [投稿受付]

投稿は随時受け付ける。

3. [投稿要件]

投稿にあたっては次の要件を満たしているものとする。本要件を満たしていないことが明らかになった場合、編集委員会はその投稿を受理しない。また会報掲載後に本要件を満たしていないことが明らかになった場合、編集委員会はその掲載を取り消すことがある。

[1] 未公開の完全原稿であること。

[2] 盗用や剽窃、データの捏造や改ざんなどの研究活動における不正行為を行っていないこと。

[3] 投稿原稿が本会執筆要領に則っていること。

4. [投稿区分]

会員が投稿できる区分は以下の通りとする。

[1] 論文

[2] 翻訳

[3] 研究ノート

[4] 書評

[5] 公開講演要旨

[6] 研究者プロフィール

[7] 彙報（会員業績、研究活動、会員消息）

[8] 国内外研究所情報・文献所在案内、ブック・インフォメーション、海外便り、その他

5. [編集委員会]

編集委員会は本学会事務局によって構成する。

6. [査読]

[1] 投稿原稿が上記投稿区分のうち論文である場合には、編集委員会が委嘱する複数の専門家によって査読を行う。

[2] 編集委員会は専門家による査読をもとに、①採用、②条件付き採用、③再査読、④不採用のいずれかの判定を行い、その結果を著者に通知する。

[3] 査読の結果、「②条件付き採用」または「③再査読」となった投稿については、結果が著者に通知されてから編集委員会の定める期日までに修正稿が提出されなかった場合、編集委員会は著者が投稿を取り下げたものとみなす。

日本アイスランド学会会報 44 号 (2025 年)

ただし、編集委員会は修正稿の提出期日について、著者に必要とされる合理的な期間を設けるものとする。

7. [提出方法]

原稿は事務局へ提出するものとし、その詳細については別に定める本会執筆要領に準ずる。

8. [書式等]

その他、引用の方法、註、参考文献などの書式は、別に定める本会執筆要領に準ずる。

9. [J-STAGE での公開とオープンアクセス]

本会は会報を J-STAGE にて電子公開する。また、会報に掲載される著作物は原則としてエンバーゴ（公開制限）を定めず、すべてオープンアクセス（OA）とする。

10. [著作物の取り扱い]

本会における著作権の取り扱いについては、別に定める本会著作権ポリシーに基づくものとする。また投稿者は本会への投稿時に本会の著作権ポリシーに同意したものとする。

11. [その他]

その他本規定に定めのない事柄については、必要に応じて編集委員会が判断し、都度すべての会員に対して周知するものとする。

(目的)

1. 本ポリシーは、日本アイスランド学会（以下、本会という。）に投稿される著作物に対する著作権の取り扱いを定めるものである。

(定義)

2. 本ポリシーにおいて、次の各号に掲げる用語は当該各号に定める意義を有する。

(1) 著作物

著作権法第2条第1項第1号に規定するものであって、以下のいずれかに該当するものをいう。

- ① 本会の発行する出版物に投稿される論文、翻訳、研究ノート等
- ② 本会の公式ウェブサイトにて公開される論文や解説記事等
- ③ その他、本会が指定するもの

(2) 著作者

本会の会員等であり、著作権法第2条第1項第2号に規定するものをいう。

(3) 著作財産権

著作物の著作財産権をいい、著作権法第21条（複製権）、第22条（上演権及び演奏権）、第22条の2（上映権）、第23条（公衆送信権等）、第24条（口述権）、第25条（展示権）、第26条（頒布権）、第26条の2（譲渡権）、第26条の3（貸与権）、第27条（翻訳権、翻案権等）及び第28条（二次的著作物の利用に関する原作者の権利）に定めるすべての権利を含む。

(4) 著作者人格権

著作物に関する著作者人格権をいい、著作権法第18条（公表権）、第19条（氏名表示権）及び第20条（同一性保持権）に定めるすべての権利をいう。

(著作権の帰属)

3. 著作財産権は著作者に帰属する。

(著作物に対するクリエイティブ・コモンズ・ライセンス付与への同意)

4. 著作者は著作物を本会に投稿した際に、本会が定めるクリエイティブ・コモンズ・ライセンスを自らの著作物に付与することに同意したものとする。このライセンスは「表示 - 非営利 - 継承 4.0 (商用利用禁止、継承)」
(<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/deed.ja>) とする。



(著作者による著作物の利用)

5. 本会は著作者による著作物の利用に一切の制限を設けない。

(学会による著作物の使用)

6. 本会は、本ポリシー 4.に基づき付与されたクリエイティブ・コモンズ・ライセンスの許す範囲において本会に投稿された著作物を自由に利用できるものとする。

(論文集などへの再録にともなう事前通知)

7. 本会が自らあるいは第三者を通じて著作物を新たに編纂する論文集などに収録して刊行する場合には、著作者に対して事前に通知するものとする。

(学会による著作物の J-STAGE での公開)

8. 本会は、原則としてすべての著作物を J-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/>) において公開する。ただし、特段に配慮すべき場合(著作物に個人情報や公開に配慮を要する内容などが含まれる場合)には、学会は著作者と協議の上で公開の可否を改めて判断するものとする。

(著者による保証等)

9. 著作者は、投稿に際して当該著作物が次の各号を満たすものであることを保証する。
- (1) 第三者の著作権、特許権、実用新案権、意匠権、商標権、ドメイン・ネーム及びその他の知的財産権並びにこれらの出願または登録に関する権利等の知的財産権、その他一切の権利を侵害していないこと。
 - (2) 著作物が二重投稿ではないこと、もしくは過去に一切公表されたことがないこと。
 - (3) 著作物が共同著作物である場合には、本会への投稿に先立って、当該共同著作物の他の著作者全員から本会への投稿に関して同意を得ていること。
 - (4) 本会の定める著作権ポリシー、投稿規定および執筆要領を遵守していること。
 - (5) 著作物において第三者の著作物を引用する場合には出典を明記していること。

(本ポリシー制定以前の著作物に対する遡及適用措置)

10. 本ポリシーが制定される以前の著作物についても、学会は本ポリシーに基づいて取り扱うことができるものとする。ただし、本項に基づいて利用された著作物について著作者より本会に対して異議申し立てがあった場合には、本会は著作者と協議を行うものとする。

(紛争解決に関する協力)

11. 著作物が第三者の権利を侵害する等によって著作物に関して紛争が発生した場合、あるいは発生する恐れがある場合には、著作者がその責任を負うものとする。ただし、本会は必要に応じて著作者と協議の上でこれに対処する。

日本アイスランド学会著作権ポリシー

(協議)

12. 本ポリシーに定めのない事項および本ポリシーの各項の解釈に疑義が生じた場合、著作者および本会は信義誠実の原則に則って協議するものとする。

『日本アイスランド学会会報』論文・記事等執筆要領

(2024 年 5 月 25 日制定)

1. 使用言語

日本語、アイスランド語、その他のスカンディナヴィア言語（スウェーデン語、デンマーク語、ノルウェー語）、英語のいずれかとする。

2. 原稿サイズ・枚数

用紙は B5 縦サイズ、横書きとする。

[1] 【論文】

17 枚以内程度(400 字詰め原稿用紙として 50 枚以内を目処)

[2] 【翻訳】

17 枚以内程度(400 字詰め原稿用紙として 50 枚以内を目処)

[3] 【公開講演要旨】

2 枚以内(同 5 枚以内を目処)

[4] 【書評】

4 枚以内(同 10 枚以内を目処)

[5] 【研究ノート】

10 枚以内(同 28 枚以内を目処)

[6] 【研究者プロフィール】

同 4 枚以内(同 10 枚以内を目処)

[7] 【彙報(会員業績、研究活動、会員消息)】

適宜

[8] 【国内外研究所情報・文献所在案内、ブック・インフォメーション、海外便り、その他】

適宜

3. 1 ページあたりの文字数およびフォントサイズ

1 ページあたりの文字数は次の通りとする。またフォントサイズは 10.5pt とする。

【和文】

1 行 36 文字×34 行=1224 字

【欧文】

1 行 68 ストローク×34 行=2312 字

4. 様式

様式は原則自由とするが、原稿内では統一した様式を用いることとする。ただし、以下に定める箇所については本会の様式に基づくものとする。

[1] タイトルと氏名、所属先、連絡先（任意）の情報をページ冒頭に記すこと。

[2] 参考文献等で掲げるウェブサイトの URL が長い場合には、適宜 URL の縮小サービスを利用するなどして短いものを記載することを推奨する。

5. 姓を持たない著者の著作物の扱い

アイスランドの研究者の中には姓ではなく父称を持っている場合がある。この場合はアイスランドでの通則に従い、以下のように引用や参考文献には父称ではなく名前(名)を用いることとする。

(引用の場合)

【誤】

Bragason & Sigurðardóttir (2021)

↓

【正】

Úlfar & Þórunn (2021)

(参考文献の場合)

【誤】

Bragason, Úlfar, & Sigurðardóttir, Þórunn. (Ed.) (2021). *Reykjaholt Revisited. Representing Snorri in Sturla Þórðarson's Íslendinga saga*. Reykjavík: Stofnun Árna Magnússonar í íslenskum fræðum.

↓

【正】

Úlfar Bragason & Þórunn Sigurðardóttir (Ed.) (2021). *Reykjaholt Revisited. Representing Snorri in Sturla Þórðarson's Íslendinga saga*. Reykjavík: Stofnun Árna Magnússonar í íslenskum fræðum.

6. 写真や図表などの取り扱い

著者は自らの責任において使用する写真や図表などの使用許諾を適切に得た上で、以下を満たしていなければならない。

[1] 掲載した写真や図表それぞれに番号とタイトルを付すこと。

[2] 他の文献からの引用や転用である場合には必ず典拠を示すこと。

7. 提出方法

[1] 原稿はデータファイルを事務局に提出するものとする。

[2] データファイルは本文や参考文献、註など必要な内容すべてを一つの Word ファイルにまとめたものとする。

8. その他

その他本要領に定めのない事項については、その都度編集委員会が判断するものとする。